

月見松遺跡  
第Ⅲ次緊急発掘調査概報

1977

長野県伊那市教育委員会

# 月見松遺跡第Ⅲ次緊急発掘調査概報

1977

長野県伊那市教育委員会

## 序

月見松遺跡は伊那市内 450個所の埋蔵文化財包蔵地のうちで最も大きな集落複合遺跡と目され、伊那市民の財産として、史跡に指定し保存をうけて参りました。

然るに最近の経済状況の変動となる理由により、現状の畑地のままにしておくことは困難となりましたので、文化庁と協議のうえ、土地所有者の意向を考慮して、記録保存として残すこととなり、国県補助による伊那市の事業として本年度当初の4月から6月にかけて緊急発掘を行ないました。当遺跡は昭和43年の土地改良事業により、一部が破壊され、昭和48年度中央道工事により遺跡地東端部が道路敷地となり、これに伴う墓地造成で南端部の月見松城跡が埋没しました。その都度緊急発掘が行なわれ、報告書として、刊行され遺跡の範囲の重要性が認められています。

今回の第3次調査は第1次調査の結果、最重要部分として埋蔵保存をしておいた地籍であります。それだけに発掘開始当初から密接した遺構が一面に姿を現わし、人々の目を驚かせたのであります。その結果、東半分も水田化に埋没させ、水田下に保存されることとなったのにはまことによろこばしいことでもあります。

最後に、本発掘事業を進めるにあたっては関係各位の並々な御協力のもとに順調に進行できたこと、また、現地作業をすませたあとの、遺物の整理・概報の作製には、林団長、及び各調査員、ならびに遺物の図版化に御労苦いただいた上川名昭先生に御苦勞を願った。また、さらに、御苦勞を下された文化庁及び、県教育委員会文化課、その他各位に対し、絶大なる感謝をささげるものであります。また、この概報が、学問上・教育上に活用されることを切に望むものであります。

昭和52年 2月25日

伊那市教育委員会

教育長 伊 沢 一 雄

## 凡 例

1. この調査は、国県の補助事業による緊急発掘調査であるため、早急に概報刊行の義務が生じた。よって、この概報は、図版を主体にして、文章記述はできるだけ簡略化した。
2. この調査は、昭和43年度の第1次調査、昭和48年度の第2次調査に続く、第3次調査である。
3. この調査は、個人の水田造成事業に伴うもので、時期的に限定されたため極めて緊急性が要求されたが、調査の主眼を、前次調査に基づき、でき得る限り、「縄文中期集落構造の究明」に重点を置いた。詳細な点については、本報告書刊行の機会を待ちたい。
4. ①本文及び各一覧表の作成は、林、小池、田畑の三者による分類、執筆であり、それぞれの末尾に担当名を記入した。  
②写真撮影 田畑、小池、林、今井  
③土器及び石器実測図及び図版作製 上川名昭  
④遺構実測図 田畑辰雄 笹沢 浩

# 目 次

序

凡 例

目 次

挿 図 目 次

表 目 次

図 版 目 次

I	位置および環境	( 1 ~ 3 )
1.	遺跡の立地と由来	( 1 )
2.	調査史	( 1 ~ 3 )
II	調査の経過	( 4 ~ 6 )
1.	保護措置の経過	( 4 )
2.	発掘調査の経過	( 4 ~ 5 )
3.	調査日誌	( 5 ~ 6 )
III	遺 構	( 9 ~ 12 )
1.	住 居 址	( 9 ~ 10 )
2.	土 壇	( 9 · 11 ~ 12 )
IV	遺 物	( 13 ~ 33 )
1.	住居址出土土器	( 13 ~ 25 )
2.	土壇出土土器	( 13 · 26 ~ 29 )
3.	出土石器	( 30 ~ 33 )
4.	土偶, 蛇体装飾, 石製品	( 30 · 34 )
V	所 見	( 35 ~ 37 )

## 挿 図 目 次

第1図	位置及び遺跡分布図	(3)
第2図	遺構配置図	(7～8)
第3図	住居址出土土器実測図(その1)(第71, 76, 79, 84, 78, 86号住居址)	(14)
第4図	住居址出土土器実測図(その2)(第82号住居址)	(15)
第5図	住居址出土土器実測図(その3)(第86号住居址)	(16)
第6図	住居址出土土器実測図(その4)(第88, 100, 102, 106, 93号住居址)	(17)
第7図	住居址出土土器実測図(その5)(第109号住居址)	(18)
第8図	住居址出土土器拓影(その1)(第78号住居址)	(19)
第9図	住居址出土土器拓影(その2)(第79号住居址)	(20)
第10図	住居址出土土器拓影(その3)(第80号住居址)	(21)
第11図	住居址出土土器拓影(その4)(第80号住居址)	(22)
第12図	住居址出土土器拓影(その5)(第84号住居址)	(23)
第13図	住居址出土土器拓影(その6)(第88号住居址)	(24)
第14図	住居址出土土器拓影(その7)(第109号住居址)	(25)
第15図	土壇出土土器実測図(その1)(第27号土壇)	(26)
第16図	土壇出土土器実測図(その2)(第43, 62, 109, 336, 337, 525号土壇)	(27)
第17図	土壇出土土器実測図(その3)(第559, 802, 688号土壇)	(28)
第18図	土壇出土土器実測図(その4)(第336, 339号土壇)	(29)
第19図	土壇出土石器実測図(その1)(第162, 180, 241, 210, 241, 215, 227, 292, 315, 381, 301号土壇)	(31)
第20図	土壇出土石器実測図(その2)(第335, 333, 403, 381, 483, 406, 409, 480, 802, 762, 690号土壇)	(32)
第21図	住居址及び土壇出土石器実測図(その3)(第111号住居址, 第12, 43, 45, 68, 73, 108号土壇)	(33)
第22図	土偶, 蛇体装飾, 石製品実測図(第77, 92, 105号住居址, 第23, 355, 405号土壇)	(34)

## 表 目 次

第1表	住居址要目一覧表	(10)
第2表	土壇要目一覧表(抄)	(11～12)

## 図 版 目 次

図版 1	遺構(その 1) 第96, 97, 98号住居址	(39)
図版 2	遺構(その 2) 第100, 101, 102号住居址	(40)
図版 3	遺構(その 3) 第103, 104, 106~107号住居址	(41)
図版 4	遺構(その 4) 土壇群の全景及び近景	(42)
図版 5	住居址出土土器(その 1) 第70, 71, 96号住居址	(43)
図版 6	住居址出土土器(その 2) 第82, 86, 89号住居址	(44)
図版 7	住居址出土土器(その 3) 第85号住居址	(45)
図版 8	住居址出土土器(その 4) 第79, 85号住居址	(46)
図版 9	住居址出土土器(その 5) 第102号住居址	(47)
図版10	住居址出土土器(その 6) 第93, 100, 106号住居址	(48)
図版11	住居址出土土器(その 7) 第109号住居址	(49)
図版12	土壇出土土器(その 1) 第27, 43, 60, 62, 109号土壇	(50)
図版13	土壇出土土器(その 2) 第23, 525, 802号土壇	(51)
図版14	土壇出土土器(その 3) 第27, 336, 339号土壇	(52)
図版15	出土石器 表採45, 68, 108, 227, 333, 438, 241号土壇	(53)
図版16	出土土器, 土偶, 蛇体装飾 第77, 92, 111号住・第355, 405号土壇	(54)

# I 位置および環境

## 1. 遺跡の立地と由来

長野県伊那市大字伊那字小沢通称北原8,103番地を中心とする地域に所在する月見松遺跡は、15万平方m以上に展開した縄文時代中期の大集落址である。

天竜川右岸のこの遺跡を中心地点とした半径約6kmの範囲は、西側の木曾山脈より東流し、天竜川に注ぐ小黒川、小沢川、大清水川等によって形成された複合扇状地である。この扇状地内には、縄文時代中期の遺跡のみで58遺跡が散在する。この地域の扇央部を流れるのが小沢川で比高50mのU字谷を形成しているが、谷の北岸の段丘端に月見松遺跡が立地している。その範囲は東西約600m、南北250mの長楕円状に展開し、この複合扇状地内で最も大きな規模をもつ集落址と目されている。その大部分は縄文時代中期の初頭から末葉に至る時代のものであるが一部に平安時代集落址が含まれている。

地質的にはこの扇状地は大泉礫層の堆積より成っているが、厚さ20m余の該礫層の上に新期ローム層を戴せている。もともと、礫層の下位には数枚の浮石層を介在させ、ローム層の下部にも何枚かの薄い礫層を介在させている。厚さ6～8mの新期ローム層には数枚の浮石層があり、洪積老末期の風成堆積によるものとされ、関東地方における立川ローム層に対比されている。本遺跡における竪穴遺構はこの新期ローム層の上面を穿って設営されている。この上面は酸性の腐植土壌が平均約1m堆積している。

「月見松」の名は、遺跡の南部、小沢川に臨む崖端に「小沢古城跡」が遺存しこのうちに月見松とよばれる赤松の老木がそびえている。幕末のころ土地の俳人、歌人の吟詠の場所として親しまれていたことに由来するものである。

## 2. 調査史

太平洋戦争末期、農兵隊の手により開墾され畑地として利用されるようになってから遺物が多く地表に露出し、御子柴泰正氏兄弟によって収集されていた。たまたま、信濃史料調査が昭和27年に行われ、その第一巻上、地名表にNo.3877、月見松遺跡と記され、(縄)勝坂式、加曾利E式、脱期、土器、石鏃、打石斧、磨石斧、半磨石斧、石匙、石錐、石皿、石槍、勾玉(土)前期と記録されている。

### 第1次緊急発掘調査

昭和43年度、原田井土地改良計画により遺跡地全面に水田化工事が施されることとなり、関係機関が何回か協議した結果、記録保存事業のための緊急発掘調査が実施された。同年3月か



ら4月にかけて約1ヶ月を費して、遺跡の中心部の南半部約7,800平方m(東西130m×南北60m)が発掘調査された。発掘区全域にわたって縄文中期に所属する竪穴式住居址54軒、同じく特殊遺構5箇所、平安時代に所属する竪穴式住居址4軒が展開していた。

遺物は、縄文時代中期の初頭から終末に至る所産の土器、石器が極めて多数、平安時代の灰釉陶器、土師器、宋残など若干を採集した。なかでも顔面把手付甕形土器は優品であった。また縄文時代中期の土器群は、中葉の時期のものは若干であったが、初頭および中葉のものは極めて量が多く形式も多様で、中期全期間を通じて凡そ七期に分類することが可能となった。特に中期初頭のものは極めて特徴的で、伊那谷地域を中心とする一定の分布圏をもつ土器文化と解され「月見松式」として固定されるに至った。発掘報告書は、伊那市教育委員会により「月見松遺跡緊急発掘調査報告書」として、昭和43年12月に刊行されている。

なお、遺跡の保護措置が、発掘調査中から配慮された。まず遺跡の西端から中央部にかけての南端部20,000平方m(100m×200m)を改田工事を設計変更して水田下に埋没させ、つづいて発掘区の北接部分8,000平方mが工事を停止し現状の畑地のまま保存されることとなった。この地点が今回の第Ⅲ次調査の対象地となった。また、発掘区全域も水田下に埋没させることとした。以上凡そ36,000平方mの範囲を保存し、国「史跡」指定地としての申請を意図し、文化庁関係者の視察も数回にわたって行われたが、土地所有者の同意が得られず、ようやく伊那市史跡として指定し、現状保存地域8,000平方mに対しては、借地料を支払ってその保護保存を計ってきたのであった。

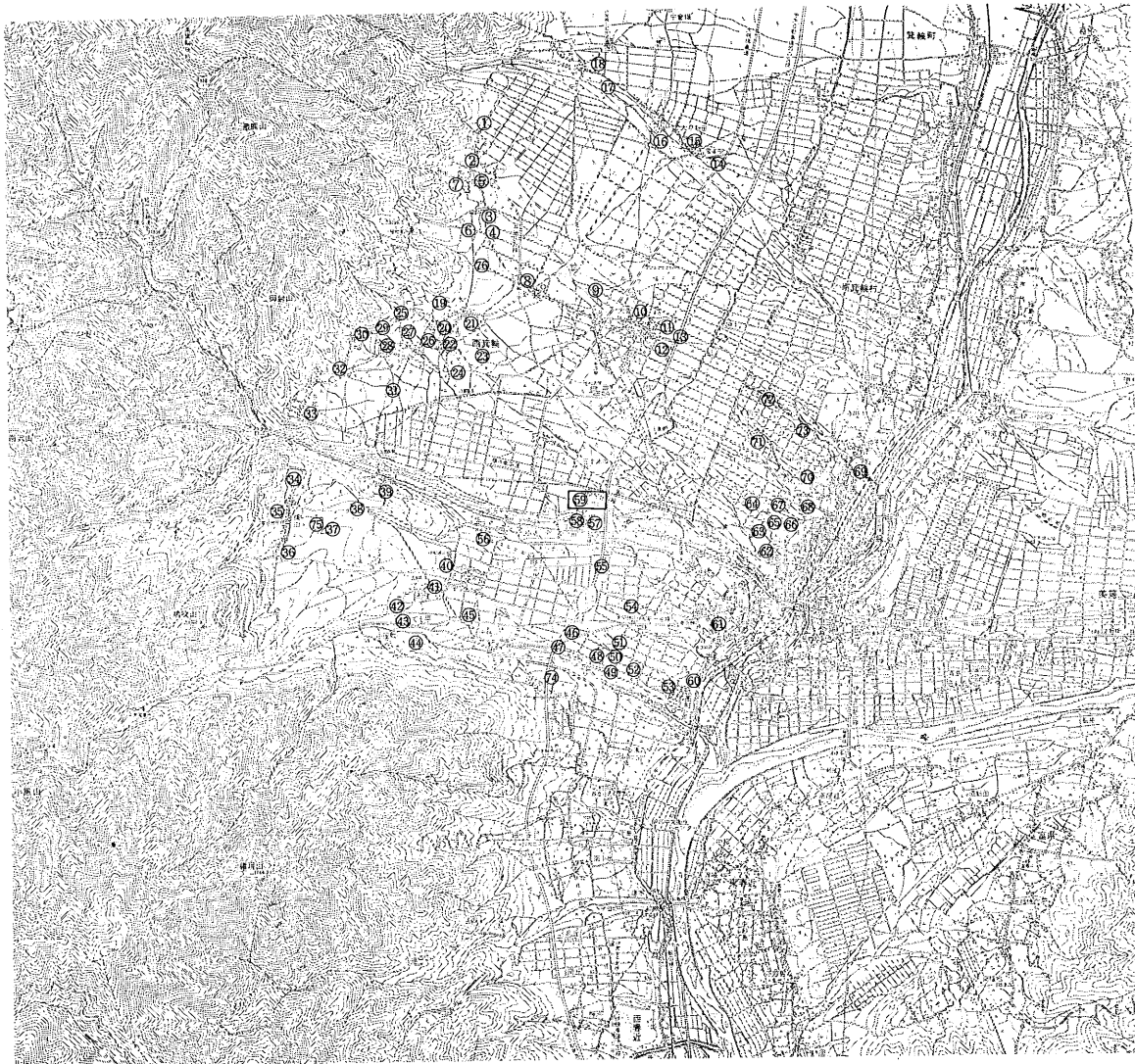
## 第2次緊急発掘調査

月見松遺跡の最東端部分が中央高速自動車道の敷地として買収されたため、県教育委員会は日本道路公団とその保護措置について協議を進めた結果「工事前に発掘調査して記録保存とする」ことに決定した。

昭和48年6月8日から7月13日まで28日間に亘って、中央道遺跡調査会の編成した調査団(団長大沢和夫、調査主任宮沢恒之)の手によって発掘調査が実施された。

発掘地点は、第1次調査地点の東方300mの畑地で発掘面積は約6,000平方mに亘った。調査の結果、縄文時代中期初頭の竪穴式住居址8軒、小竪穴2基、土壇13基、および平安時代の竪穴式住居址3軒および時期不明の火葬墓3基、集石址3基、土壇群が検出された。この地点においても、第1次調査と同じく縄文時代中期の住居址群と平安時代の住居址群との複合状態を示していた。縄文時代初頭の住居址群出土の土器群は個性的な様相を呈し、第1次調査の際の「月見松式」設定をさらに固定化せしめることに貢献した。なお平安時代住居址群はその分布が比較的疎であることが判明した。

調査の状況については「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市内その2—」として、日本道路公団名古屋建設局ならびに長野県教育委員会から公刊されている。(林茂樹)



第1図 位置及び遺跡分布図(1:90,000)

### 遺跡の名称

- ①北割 ②田代 ③古屋敷 ④金鑄場 ⑤財木 ⑥蔵鹿山麓 ⑦経ヶ岳麓 ⑧西  
 箕輪小学校 ⑨大萱西 ⑩西箕輪養護学校 ⑪熊野神社 ⑫富士塚 ⑬在家 ⑭高  
 根 ⑮久保田 ⑯塚畑高根 ⑰中道南 ⑱桜畑 ⑲殿屋敷 ⑳天庄1 ㉑上戸  
 ㉒天庄2 ㉓溝畑 ㉔下の原 ㉕堂洞 ㉖富士垣外 ㉗宮垣外 ㉘堀の内 ㉙上の  
 原 ㉚小花岡 ㉛中の原 ㉜与地山寺 ㉝与地原 ㉞北方 ㉟矢塚畑 ㊱八人塚  
 ㊲おぐし沢 ㊳丸山清水 ㊴穴沢 ㊵ますみヶ丘上 ㊶船窪 ㊷鼠平2 ㊸鼠平1  
 ㊹上手原 ㊺城畑 ㊻ますみヶ丘 ㊼赤坂 ㊽伊勢並 ㊾八人塚古墳 ㊿狐塚南  
 古墳 ①狐塚北古墳 ②山の神 ③小黒南原 ④富士塚 ⑤城楽 ⑥小沢原  
 ⑦小沢神社 ⑧月見松古墳 ⑨月見松 ⑩ウグイス原団地 ⑪上の山 ⑫高尾  
 ⑬鳥居原 ⑭石塚 ⑮今泉 ⑯原垣外 ⑰かんぜん ⑱御園東部 ⑲御園南部  
 ⑳宮の前 ㉑清水洞 ㉒牧ヶ原 ㉓大清水 ㉔山本田代 ㉕関畑 ㉖上溝

## Ⅱ 調査の経過

### 1. 保護措置の経過

月見松遺跡の発掘調査は、昭和43年度に西天竜地区の土地改良事業の時に第一次調査が、中央自動車道西宮線の時に第二次調査がそれぞれ行なわれ、報告書が刊行されてきました。今回の発掘調査は第三次となり、発掘調査地区は昭和43年度の折に、現状保存措置を施した地区でこの場所は市が借地という形で、地主へ地代を払ってきていました。ところが、畑地のために生産、収入が少ないと地主側からの要望が、毎年のように教育委員会へ申し出されたので、遺跡保存とはいえ、個人の犠牲を払ってまでも保存しては地主に対し、弁解の余地がないとの判断から、今回の調査に踏みきった次第であります。

今回の発掘調査は第一次調査のおり、調査に積極的に御努力下さった、林茂樹先生を団長に地元の考古学研究者を中心に調査団を編成、4月上旬に調査に着手しました。

### 2. 発掘調査の経過

地主側から本年度中に水田耕作をしたいという要望が強く出されたため、早急に発掘調査に着手するために、3月4日に発掘調査委員会と発掘調査団を編成した。

#### 月見松遺跡発掘調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下衛	上伊那教育会会長
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松英夫	伊那市教育委員会社会教育課課長
〃	有賀武	〃 〃 課長補佐
〃	白石利彦	〃 〃 係長
〃	三沢真知子	〃 〃 主事

#### 月見松遺跡学術調査団

顧問	山田瑞穂	長野県教育委員会文化課指導主事（日本考古学協会会員）
団長	林茂樹	長藤小学校長（日本考古学協会会員）

副 団 長	根津清志	中央道遺跡調査団（長野県考古学会会員）
調 査 員	小池政美	伊那市教育委員会（　　　　　　）
〃	田畑辰雄	〃（　　　　　　）
〃	辰野伝衛	中央道遺跡調査団（　　　　　　）
〃	福沢幸一	〃（　　　　　　）
〃	長瀬康明	美郷小学校教諭（　　　　　　）
〃	三村兼清	辰野東小学校教諭（　　　　　　）
〃	村上孝	中央道遺跡調査団（　　　　　　）
〃	和田武夫	駒ヶ根市博物館嘱託（　　　　　　）
〃	岩佐哲男	信州大学学生（　　　　　　）

### 3. 調 査 日 誌

3月22日 遺跡発掘地区へ、ブルドーザーを入れて、耕土及び、黒土層を排土し、褐色土層上面でとめた。この土層面までの深さは西側で約1m位あった。

3月23日 昨日と同様に東側の地区をブルドーザーによって排土作業を実施する。東側へ行くにしたがって耕土は浅くなっており、東側では約30cm位であった。

4月3日 設定したグリットを掘り下げてゆくと、西側に褐色土の落ち込みが発見された、住居址番号は、第一・二次の通し番号を利用して、70号住居址から始める。70号住居址の一角に土壇があり、第1号土壇とした。第70号住居址の北側の一帯には、本日まで50個くらいの土壇があるように思われた。

4月4日 70号住居址の北側の土壇のプラン確認と、掘り下げ、さらに70号住居址の完掘をする。本址は、加曾利E期の古い方の住居址と判明した。

4月6日 第70号住居址の完掘を終了し、清掃及び、写真撮影をする。24、25、26ライン附近を拡張して、住居址のプランを一刻も早く把握できるように努める。

4月7日 第70号住居址の実測を終える。南側の土壇群のプラン確認をする。一方ではR～Yの19～24ライン附近の拡張を進める。遺物は多量に出土し、しかも住居址の切り合い関係が確認でき、期待の持てる場所となった。出土遺物は新道、猪沢、藤内、井戸尻式の土器片であった。

4月13日 第71号住居址のプラン確認とその附近の拡張を終了し、掘り下げを開始する。同

住居址は新道式・五領ケ台式で、炉址は小さなものであった。

4月15日 第71号住居址の南側、第72号住居址の掘り下げ、さらに南側の73・74号住居址の掘り下げを実施する。第72号住居址は井戸尻式、第73号住居址と第74号住居址は切り合っている。

4月16日 A 27～R 27, A 29～R 29の範囲を一つ置きにグリットを掘り進めてゆくと、どの土壇からも多量の土器片が出土した。

4月17日 昨日実施した範囲内で、南側の掘り残された部分の拡張を進めてゆくと、住居址と土壇の検出が続々とみられ、その数はさいげんがないように思われた。

4月20日 第78号住居址からは掘り始め、東側へと進めてゆくと、同住居址が切って、第81号住居址が発見された。

4月21日 第81号住居址の東側を掘り進めてゆくと、東西に残したベルトより南側に一段床面の高くなった、第83号住居址、その北側に82号住居址が発見された。

4月22日 第84号住居址の床面はわずかに残されているだけで、東側は第84号住居址を切るようなかっこうで、第85号住居址が発見された。

4月23日 第85号住居址を東側へ進めてゆくと、一段あり、これを第87号住居址、さらに、北側へ進めてゆくと、周溝によって住居址との違いが判然としており、これを第86号住居址とした、第87号住居址の東側に第88号住居址が展開した。

4月24日 6ラインから20ラインは長芋の耕作によって破壊が著しく、遺構の完全なる検出は期待がもてなかった。

4月27日 第88号住居址の東側に第89号住居址が検出された。

4月28日 第72号住居址の完掘をする。

4月29日～5月3日 第73・74号住居址の完掘をする。

5月4日 第77号住居址と、同住居址西側に第90号住居址が発見され、掘り下げてゆく。

5月6日 第77号住居址、90号・91号住居址の写真撮影、これらの住居址の周辺の土壇の検出をすすめる。

5月7日～11日 第77、90、91号住居址周辺の土壇の検出、遺物の出土は多量であった。

5月13日 第95号住居址を発見し、掘り下げる。

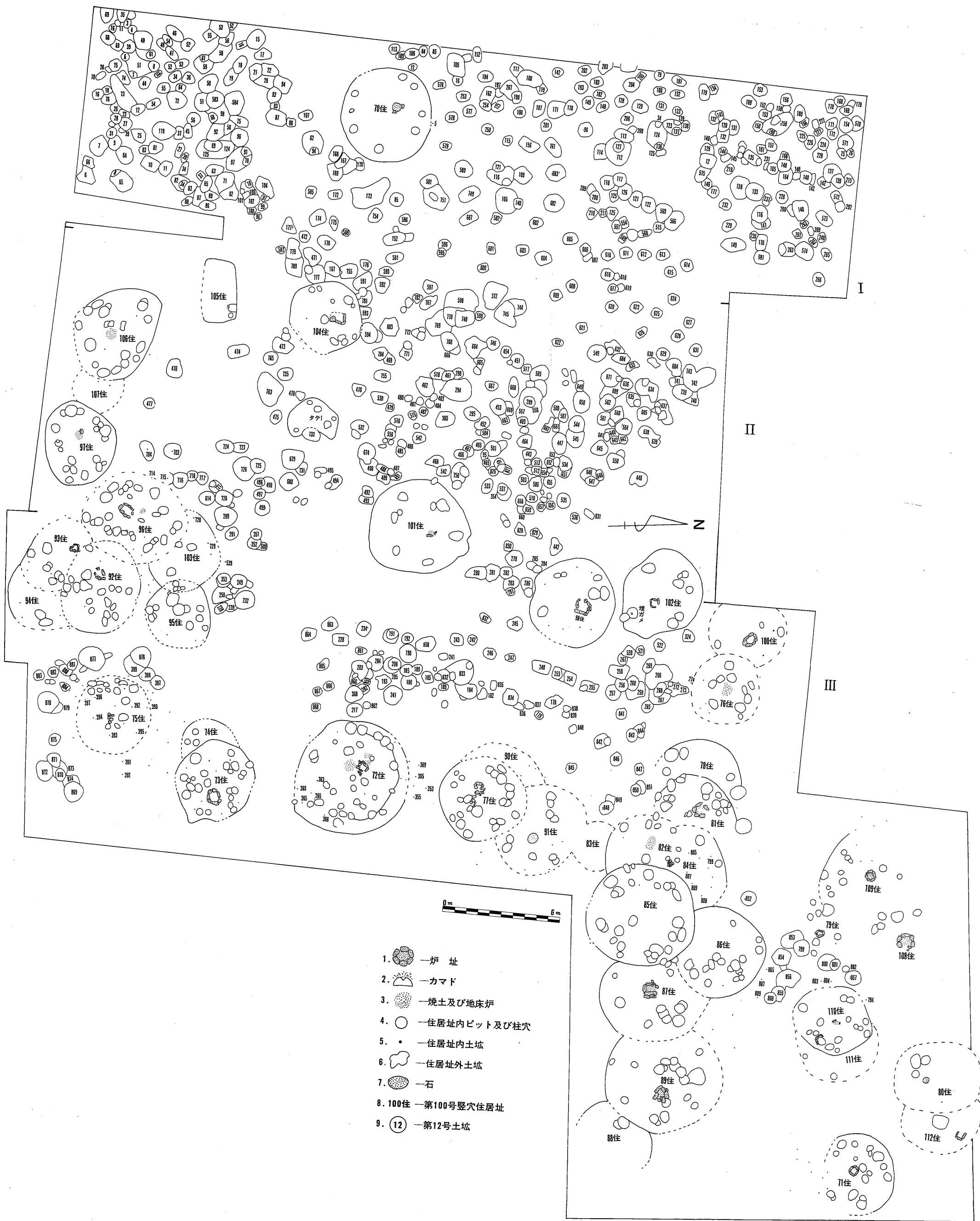
5月14日～17日 第92・93・94・95・96・97・98・99号住居址の掘り下げから完掘、またそれらの周辺の土壇の検出を続ける。

5月19日～22日 第100・101・102・103・104住居址の完掘と写真撮影。

5月26日～27日 第105・106・107・108・109号住居址の掘り下げから完掘、写真撮影をする。

5月28日 第110・111号住居址の調査完了。県文化課指導主事笹沢浩氏の測量指導を受ける。

5月30日～6月7日 住居址及び、土壇群の測量を行なう(遣り方で行なう)。(小池・田畑)



第2図 遺構配置図

### Ⅲ 遺 構

#### 1. 住 居 址

住居址は今回の発掘では42軒の住居址が発見された。これらの住居址は土塚との切り合い関係が複雑なためにプラン、及び規模把握に困難な点が多かった。したがって、二つの内容決定には推定によるところが少なからずあった。時代的には縄文前期終末期から縄文中期後葉に含まれている。(第2図遺構全測図及び第1表)

住居址の形態及概要は表を作成して説明し、比較ができるようにしておいた。第1表は、住居址要目一覧表と名付けた。一覧表の見方については、項目別に簡単な内容的説明を附記しておくことにする。さらに、項目別に若干の説明をしておく。住居址番号は、第1次・第2次調査を通じての通し番号とする。プランは円は円形、楕円は楕円形である。規模は南北・東西の大きさを表している。炉は石囲炉、地床炉、埋甕炉を表示してある。比定時期は諏訪編年に一応従った。図番号の数は、第何図の頭の番号である。図版番号も頭の番号である。備考は主に切り合い関係、炉の状態、遺物の内容、遺物の量、床面上の附属物について触れておく。

#### 2. 土 塚

土塚は発掘区の西部から中部にかけて、また1,500㎡位範囲内に展開し全部で886基検出された。土塚の全般的な諸特徴、あるいはグループ群の問題等については第2表土塚要目一覧表(抄)に、主要なもの65基の内容を抄出して掲載したがその概要について、V所見のところで述べられているので参照されたい。

土塚要目一覧表(抄)は、そのプラン・形態・遺構・共伴遺物特徴等について記し比較検討に便ならしめた。一覧表の見方については项目的に簡単な内容的な説明を附記し、同時に項目別に若干の説明をしておくことにする。プランは平面、断面形の2方向から考えてみた。法量は大きさと深さを表示し、状態は床面と壁面を綿密に記しておくことにする。土塚に伴う附随的なものとして、ピットと配石があったので、その有無を記しておくことにする。遺物は土器と石器の項目を設けておく、土器はその出土した形、あるいは、その量、及び土器編年上による位置づけをしておく、石器はその名称をつけてある。

土塚の諸特徴について、簡潔にしておくことにする。図番号及び図版番号は、その番号のみを記しておくことにする。(小池政美)

## 第1表 住居址要目一覧表

住居址 番号	プラン	規模(m)		炉	比定時期	図番号	図版 番号	備 考
		南北	東西					
70	円	4.6	4.8	石囲炉	曾利Ⅰ		5	単独に1軒のみ検出
71	楕円	4.0	4.5	石囲炉	新道	3	5	南壁と東壁の一部はナシ
72	円	5.7	5.7	石囲炉	井戸尻Ⅲ			拡張がみられる
73	円	4.6	4.4	石囲炉	井戸尻Ⅲ			西側で74住を切る
74	円?	?	?	不詳	井戸尻Ⅲ			東側で73住に切られ住居址の半分程残存
75	円?	?	?	地床炉	諸磯C			土坑等の切り合いによって壁の存在は全くナシ
76	円	?	?	地床炉	井戸尻Ⅱ	3		壁の存在不明, 床面に土器横転
77	円	4.9	4.7	石囲炉 地床炉	井戸尻Ⅲ	22	16	周溝がほぼ全周する
78	楕円	4.3	2.3	埋甕炉	新道	3・8		東壁で81住に切られ全体の4程度残存
79	円	?	?	石囲炉	藤内Ⅰ	3・9		石囲炉は五角形
80	長円?	4.0	3.5	埋甕炉	九兵衛尾根Ⅱ	10・11		今回発掘したうちでは最北東端の住居址
81	円	4.4	4.7	石囲炉	井戸尻Ⅲ			五角形の石囲炉
82	円	5.0	?	地床炉	藤内Ⅰ	4	6	切り合いが著しい
83	円	?	3.5	不詳	新道			全く不明な住居址
84	円	4.5	不明	石囲炉	新道	3・12		切り合いが著しくて残存部分はわずか
85	円	5.9	5.9	地床炉	井戸尻Ⅲ		7・8	西側で82~84住を, 北側で86住, 東で87住を切る
86	楕円	4.0	4.8	石囲炉	藤内Ⅰ	3・5	6	炉石が抜かれている
87	円	5.3	?	石囲炉	藤内Ⅱ			五角形の石囲炉
88	円	5.1	?	地床炉	藤内Ⅱ	6・13		炉石の抜けたあとナシ
89	円	5.0	5.0	石囲炉	井戸尻Ⅲ		6	壁はわずかな部分だけ残っている
90	円	?	?	不詳	藤内Ⅱ			77住に切られ91住を切る
91	円	5.24	?	地床炉	新道			建てなおしあり
92	円	5.0	5.3	石囲炉	藤内Ⅱ	22	16	土坑により炉がこわされている
93	円	3.5	3.5	石囲炉	藤内Ⅰ	6	10	94住を切り, 92住に切られている
94	円	3.5	3.5	地床炉	梨久保?			93住, 92住に切られている
95	円	3.6	3.5	地床炉	新道			103住に切られている
96	円	3.4	3.5	地床炉	井戸尻Ⅱ		5	103住に切られ92住を切る
97	楕円	4.0	5.0	石囲炉	井戸尻Ⅱ			周溝が全周している
98	円	5.03	5.07	石囲炉	曾利Ⅰ			遺物の出土量が多い
99	円	3.5	?	埋甕炉	九兵衛尾根Ⅰ			土坑の切り込み顕著
100	円?	?	?	石囲炉	井戸尻Ⅰ	6	10	黒褐色土の床面
101	円	5.68	5.56	石囲炉	曾利Ⅰ			周溝が二重に全周している
102	円	5.0	4.35	石囲炉	井戸尻Ⅲ	6	9	周溝が全周, 埋甕あり
103	円	4.0	4.0	地床炉	新道			95住を切る
104	円	4.2	4.06	石囲炉	不詳			巾広の周溝全周
105	長方	3.65	2.02	石組 粘土カマド	国分Ⅲ	22		石帯の出土
106	不正長円	5.8	4.25	石囲炉 地床炉	井戸尻Ⅱ	6	10	107住を切る周溝全周, 建て替えあり
107	円?	?	?	不詳	不詳			106住に切られる
108	円	5.0	?	石囲炉	井戸尻Ⅱ			黒色土の貼床
109	円	?	?	石囲炉	藤内Ⅰ	7・14	11	藤内Ⅰの完型品出土
110	円	4.9	4.5	石囲炉	井戸尻Ⅰ			炉石が抜かれている
111	円	3.4	?	石囲炉	月見松Ⅰ		16	炉石が抜かれている



第2表 土坑要目一覧表(抄)

土坑 番号	プラン		法量		状態		小穴	配石	遺物		備考	図 番号	図 版 番号
	平面	断面	経	深	床	壁			土器(比定期)	石器			
1	方形		53×47	35	軟弱	直立			3個体(曾利B)		70住内		
5	円形		47×45	36	平坦	〃		あり	3個体(曾利I)		木炭粒含, 70住を切る		
15	不整形	袋状	141×117	36	〃	内傾			破片(梨久保)	礫器1			
20	不整形		77×70	40	〃	外傾		あり	破片(井戸尻)				
27	円形		83×85	45	〃	〃	あり		3個体(井戸尻)		土器を割って敷つめてある ド41に貼床する	15	12 14
31	不整形		107×81	42	〃	〃		あり	破片(井戸尻)				
42	不整形		90×72	47	〃	〃	あり	あり			石棺状に組む		
43	円形	ピット状	27×?	33					破片(曾利I)	磨斧1・ノミ1		16 21	12
53	長円形	袋状	?×82	27	段あり	内傾			完形(井戸尻)				
60	不整形		83×?	38			あり		破片(藤内)				12
62	〃		118×107	32	平坦	直立	あり		半筒体(藤内)		有孔鏝付土器	16	12
63	長円形		141×?	25	〃	外傾	あり		破片(新道)	打斧1			
64	〃	一部袋状	105×71	30	〃	〃	あり		破片(貉沢)		平出3A共伴		
67	不整形	〃	97×72	41	〃	直立			破片(藤内)		平出3A共伴		
77	長円形		72×82	41	〃	外傾			破片(新道)	打斧1			
87	円形	皿状	不明	16	平坦	〃		あり					
106	不整形		130×86	26	〃	直立	あり		破片(井戸尻)				
108	長円形				〃	外傾			破片(月見松I)	磨斧1		21	15
109	〃		112×89	浅28 深37	一段あり	〃		あり	1個体(曾利I)		立石をもつ	16	12
110	〃		84×68	26	平坦	〃			破片(藤内)				
138	円形		120×110	33	〃	〃	あり(2ヶ)		破片(井戸尻)				
139	〃		63×52	37	〃	直立	あり(2ヶ)		破片(藤内)		立石		
154	不整形		200×?	37							ローママウンドをもつ土坑		
155	ぼんぼり形		124×118	42			あり	あり			立石あり		
167	長円形	一部袋状	95×70	47	平坦	他直立		あり	破片(藤内)	打斧1			
180	円形		107×96	21	凹凸	直立		あり	破片(井戸尻)	磨斧1		19	
183	〃		93×90	33	〃	〃	あり	あり					
186	〃		90×?	20	平坦	〃		あり	破片(井戸尻)	磨斧1			
214	〃		39×39	12	〃	外傾			破片(藤内)	磨斧1・打斧1		19	15
215	長円形		132×121	18	〃	〃			破片(藤内)	磨斧2		19	
231	不整形		72×69	29	〃	〃			破片(新道)		平出3A共伴		
241	円形	ピット状	50×35	27	〃	直立		あり	1個体(井戸尻)		小さめの石床面から3コ	19	
249	〃	袋状	85×90	32	〃	内傾	あり		破片(新道)	打斧1			
263	円形?		70×69	22	〃	外傾			半筒体(新道)				

土坑 番号	プラン		法量		状態		小穴	配石	遺物		備考	図 番号	図 版 番号
	平面	断面	経	深	床	壁			土器(比定期)	石器			
277	円形	袋状	90×87	33	凹凸	内傾		あり			木炭少量含		
307	円形	ピット状	35×33	27	平坦	直立		あり			立石をもつ, 木炭粒含		
308	長円形		111×84	12	〃	外傾			破片(藤内)	錐1・石匙1	深い方が袋状になる		
315	円形	袋状	110×?	26	〃	内傾		あり	破片(藤内)	三角石器1	石は床から52cm位上	19	
321	円形	袋状	50×50	35	〃	〃			破片(平出3A)	石冠			
323	長円形		92×67	21	〃	直立		あり			石は上面		
336	円形	ピット状	37×35	31	〃	〃			破片(藤内)			16 18	14
340	タマゴ形		52×40	9	〃	外傾		あり	破片(藤内)		石は床面直上		
349	円形	袋状	不明					あり	破片(月見松I)		覆土上に平板な石3コ		
355	〃		102×100	26	平坦	内傾			土偶			22	16
358	長円形		72×65	29	〃	〃	あり						
369	円形	スリパチ状	90×68	20	〃	外傾			破片(平出3A)				
372	〃		160×120	16	中央凹	内傾		あり	破片(新道)	礫器1			
395	〃		87×85	27		〃			破片(下島直後)		平出3Aを伴う		
443	長円形		35×20	8	平坦	直立		あり	破片(井戸尻)		床面に石あり		
446	〃		92×67	30	〃	〃	あり(2)	あり			ピット内に石あり		
452	円形	一部袋状	91×54	32	〃	直立			破片(藤内)				
457	円形		52×?	24	〃	〃			大破片(平出3A)				
464	長円形				〃	〃	あり	あり	破片(中期)		床面に平たい石1ヶ		
505	円形		119×?	33	〃	〃		あり	破片(井戸尻)				
525	不整形	ピット状	76×53	32	〃	や、 外傾			埋甕(井戸尻)			16	13
532	長円形		117×100	39	〃	直立	あり	あり					
535	円形		93×79	12	〃	〃		あり			4ヶの石が床面をお、う		
542	長円形		78×65	21	〃	〃		あり			床面に石多数		
545	円形		110×?	34	〃	一部外傾 他直立		あり			周溝あり, 石床に1		
551	長円形		112×102	18	〃	直立		あり			平坦な石2ヶ床面		
671	円形		60×51	16	〃	外傾		あり	破片(中期)		中央に石1ヶあり		
696	長円形		46×39	31	〃	〃		あり			みかげ石4コ床面		
733	不整形		105×77	28	〃	直立	あり	あり					

## IV 遺 物

### 1. 住居址出土土器

住居址出土の土器の器型は、大型深鉢、小型深鉢、浅鉢、有孔つば付土器、甕型土器等多種多様に富んでいる。一応、完成品に近くて、図上復元が可能な数は28個を数える。

時代は縄文中期前半から縄文中期後半にいたる縄文中期全般にわたっている。編年上で言うならば新道式、藤内式、井戸尻式、曾利式に属している。

これら出土した土器は渾大な量に達している。ここにあげた実測図及び拓本の数はほんのわずかにすぎない。さらに概報のために、そのなかの主たるものをピックアップした。

出土土器実測図は第3図から第7図の5枚あげてある。それぞれの土器个体番号は図の見出しに付記した番号により、出土住居址を示してあるので参照されたい。なお、第1表にもこの図番号が示されている。

住居址出土土器拓影の図は第8図から第14図の7枚あげてある。拓影の照合の仕方は住居址出土実測図と同じ見方でよい。土器のほとんどは、梨久保式、新道式、藤内式、井戸尻式に属している。

### 2. 土塚出土土器

土塚出土の土器の器型は甕、有孔つば付土器、深鉢等の器型がある。一応、完型品に近くて図上復元が可能な数は12個を数える。

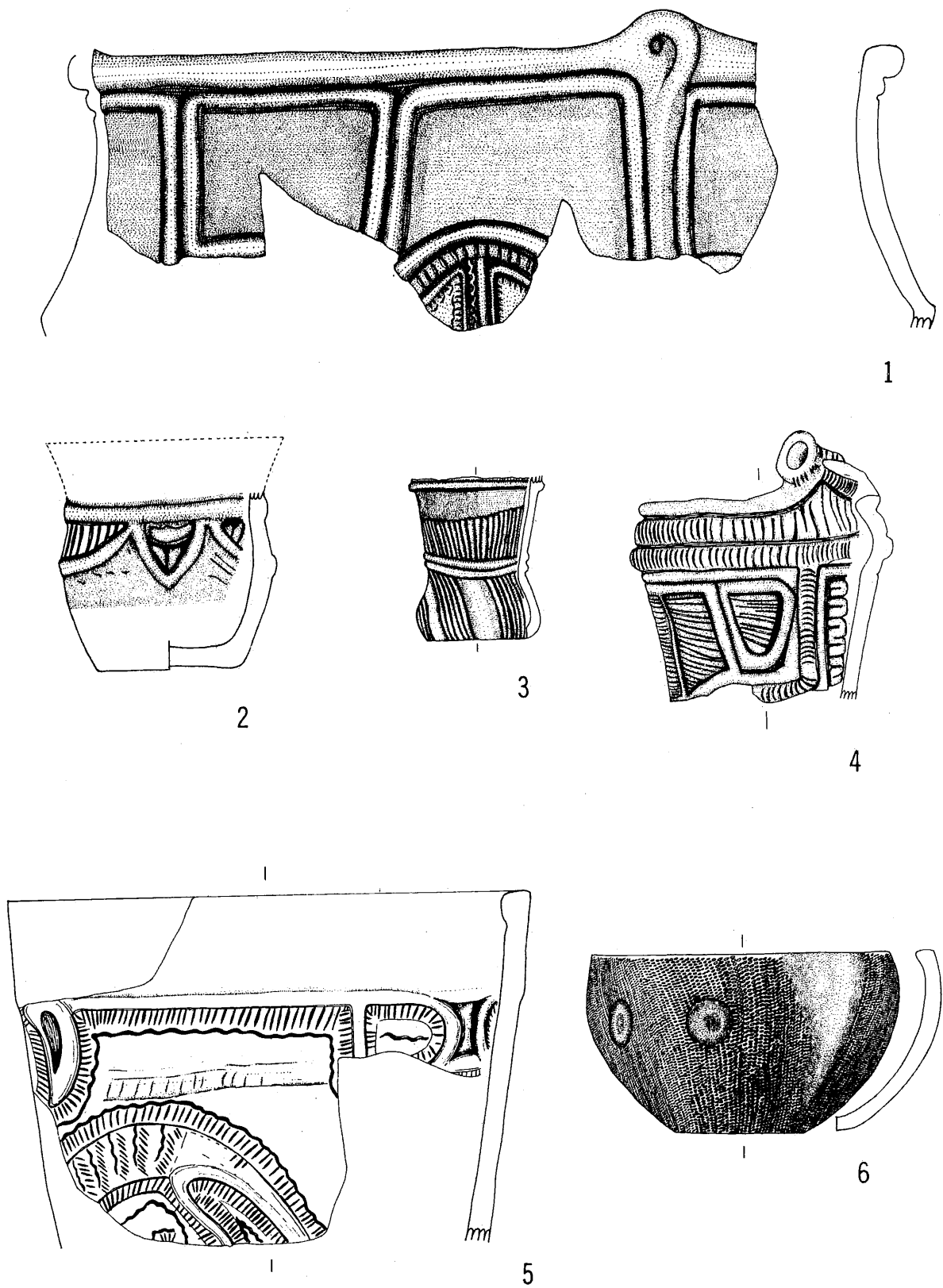
時代は縄文中期中葉から縄文中期後半にいたっている。編年的に特に、諏訪編年に限定するならば、藤内式、井戸尻式、曾利式に属している。

土塚の数は前にも触れたように884基発見され、そのなかで土器の出土したそれは63基を数える。

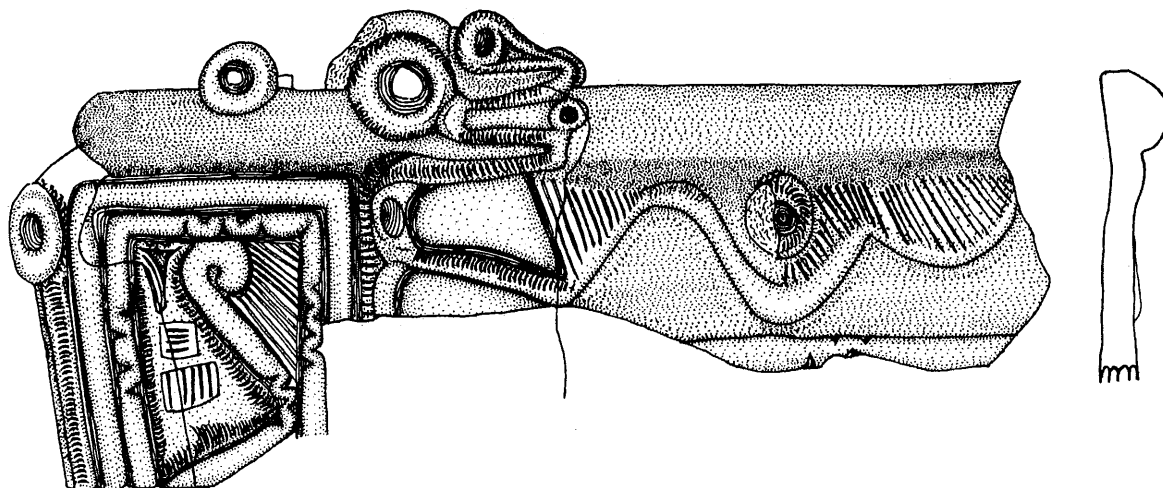
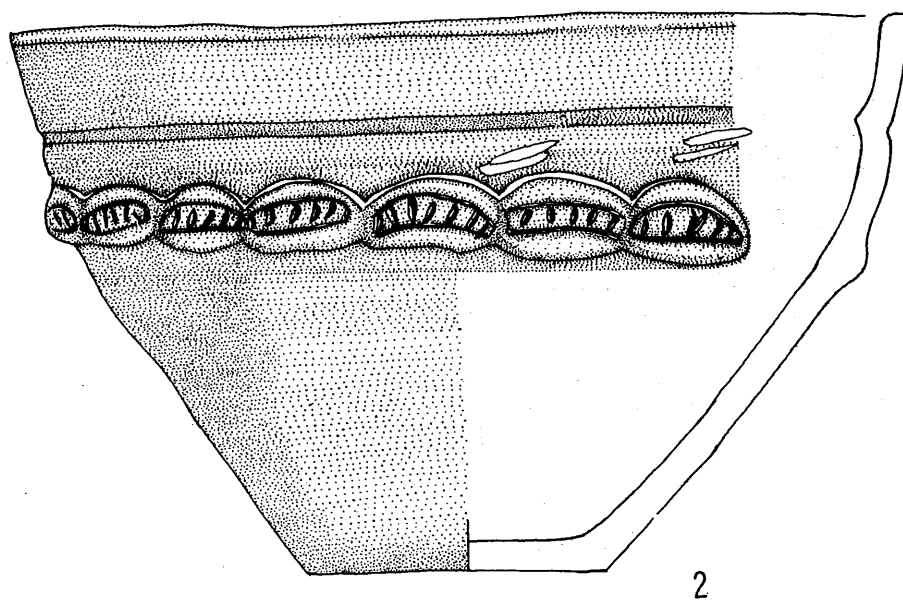
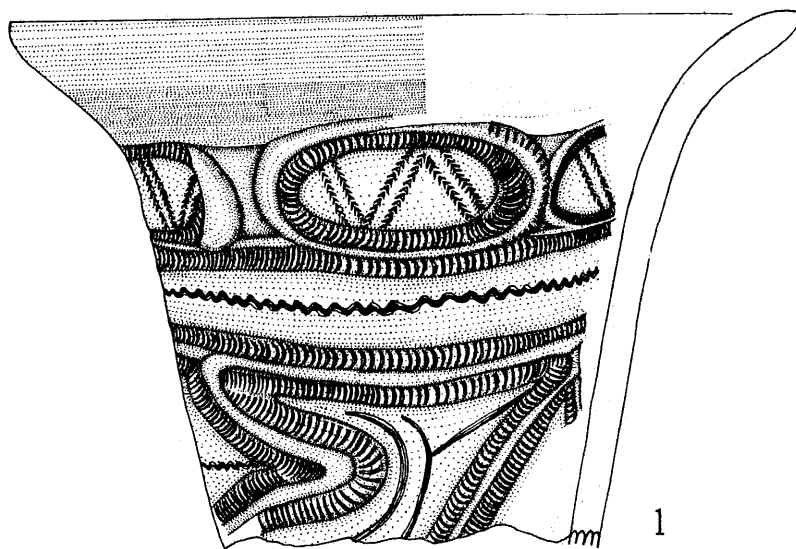
これら出土した土器はかなりの量に達している。ここにあげた実測図は全てのものである。概報のスペースの関係で、今回は拓影については割愛したが本報告に掲載した。

出土土器実測図は第15図から第18図の4枚あげてある。実測図の見方については1住居址の項に触れてあるので、それを参照されたい。

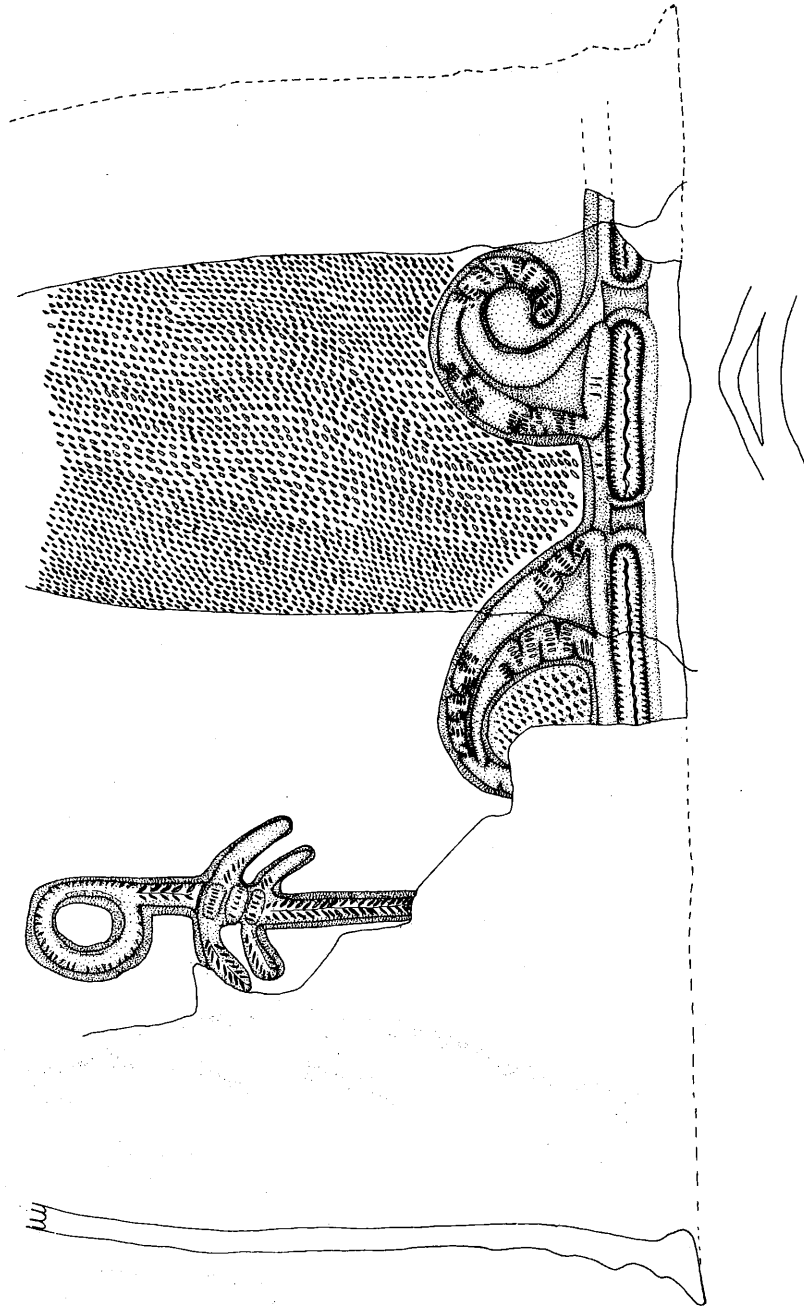
(小池政美)



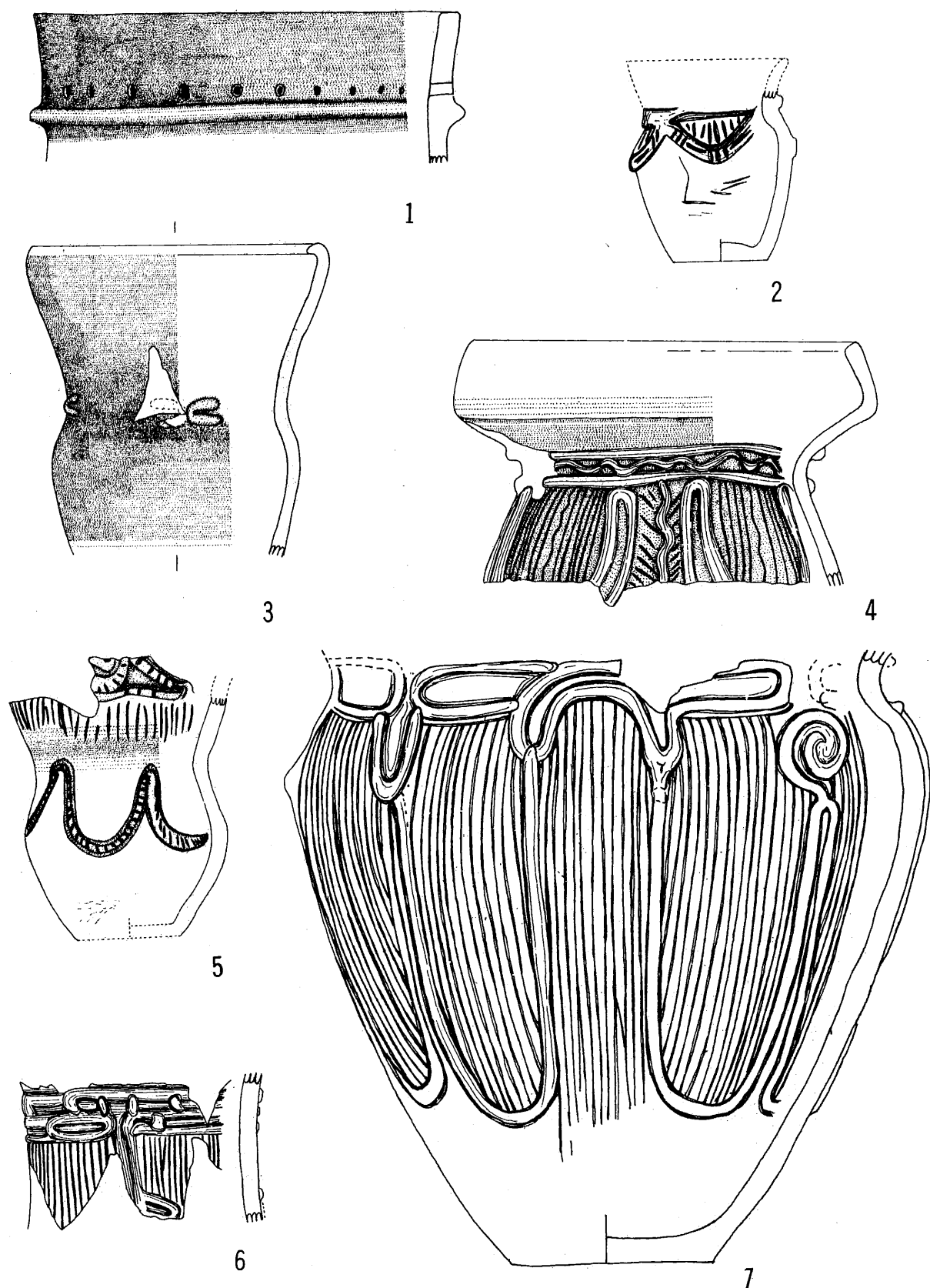
第3図 住居址出土土器実測図(その1) 1—71号住居址, 2—76号住居址, 3—79号住居址, 4—84号住居址, 5—78号住居址, 6—86号住居址, 縮尺 $\frac{1}{2}$



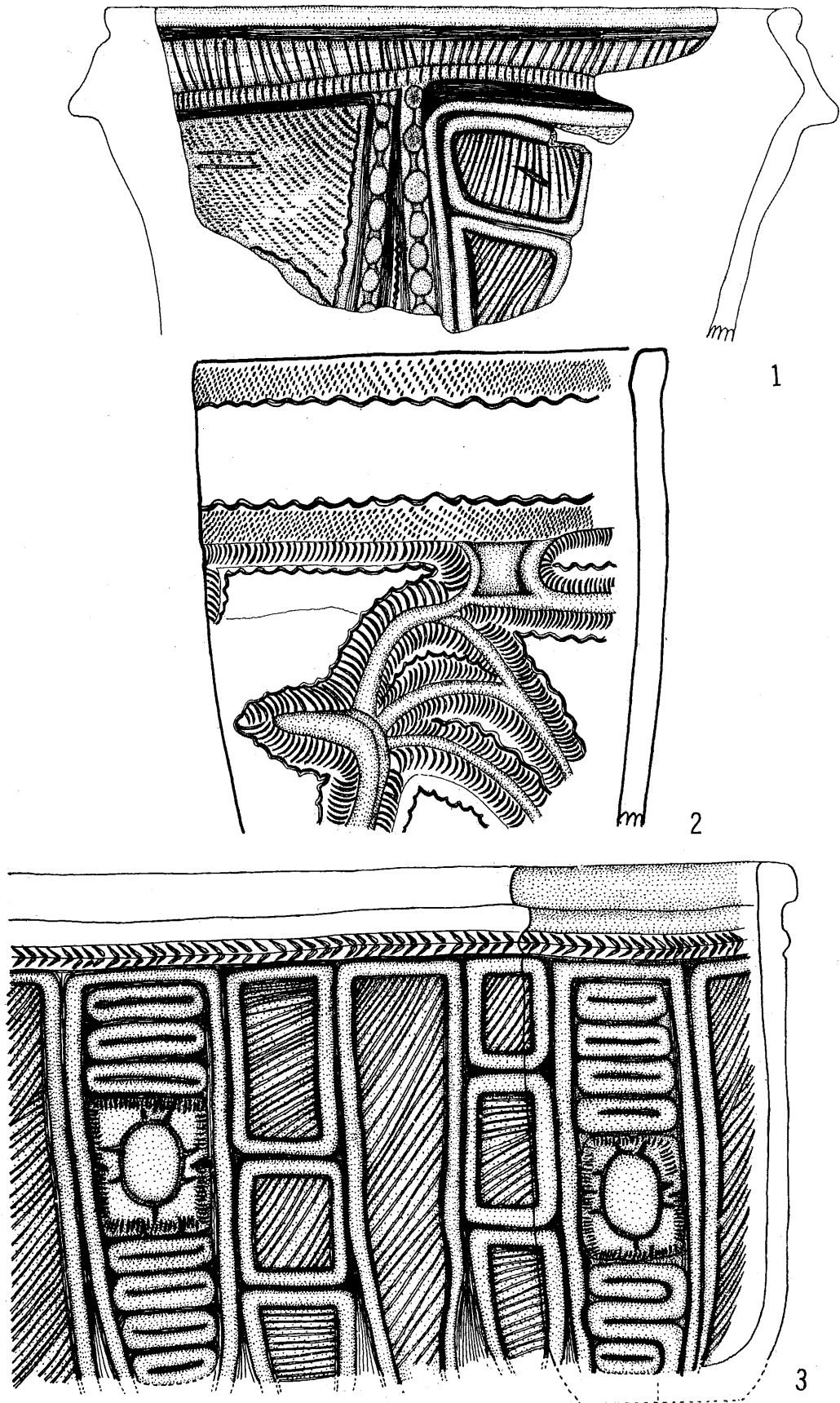
第4図 住居址出土土器実測図（その2）82号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$



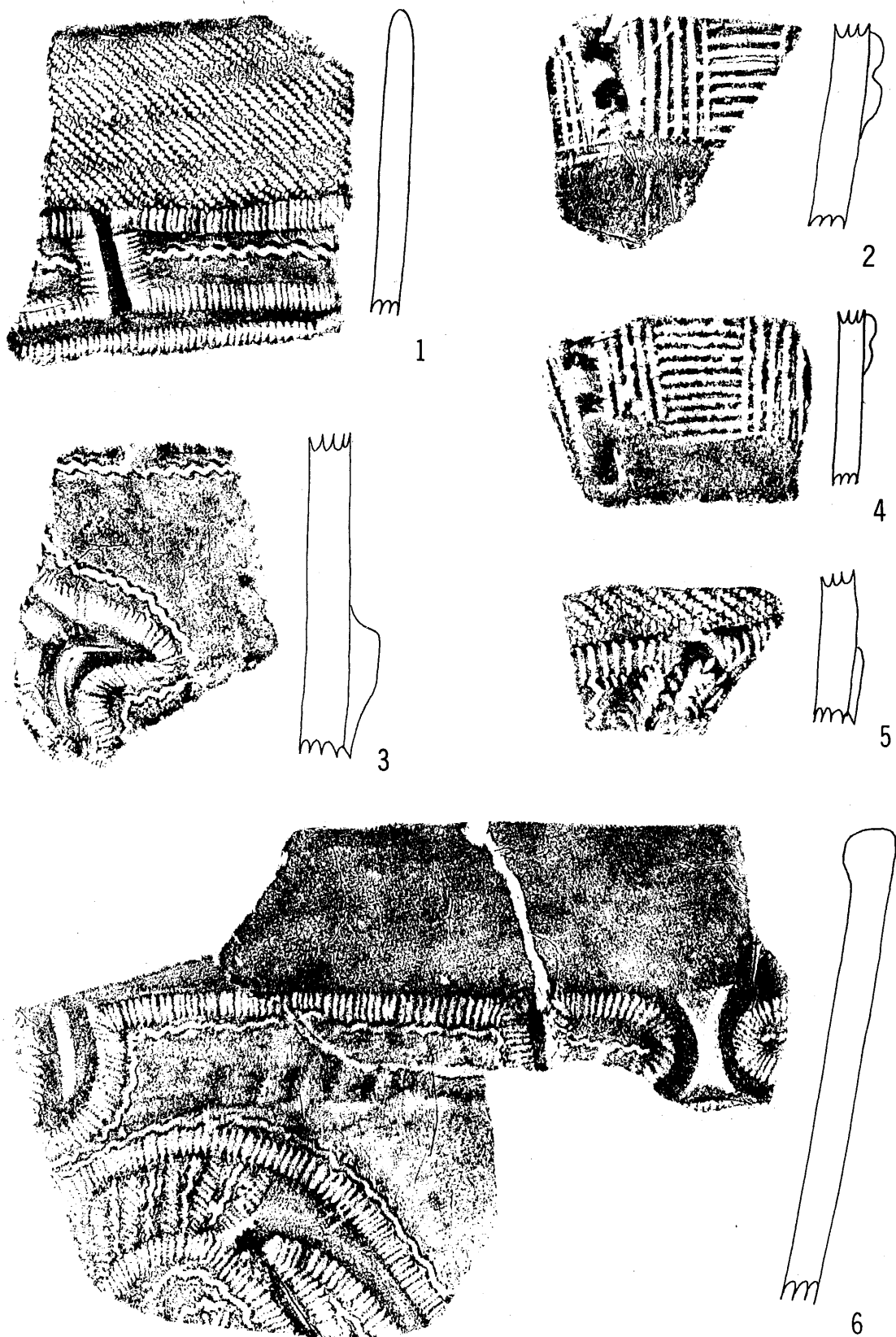
第5図 住居址出土土器実測図（その3）86号住居址 縮尺 $\frac{1}{4}$



第6図 住居址出土土器実測図(その4) 1—88号住居址, 2—100号住居址, 3—106号住居址, 4—102号住居址, 5—93号住居址, 6—106号住居址, 7—102号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$

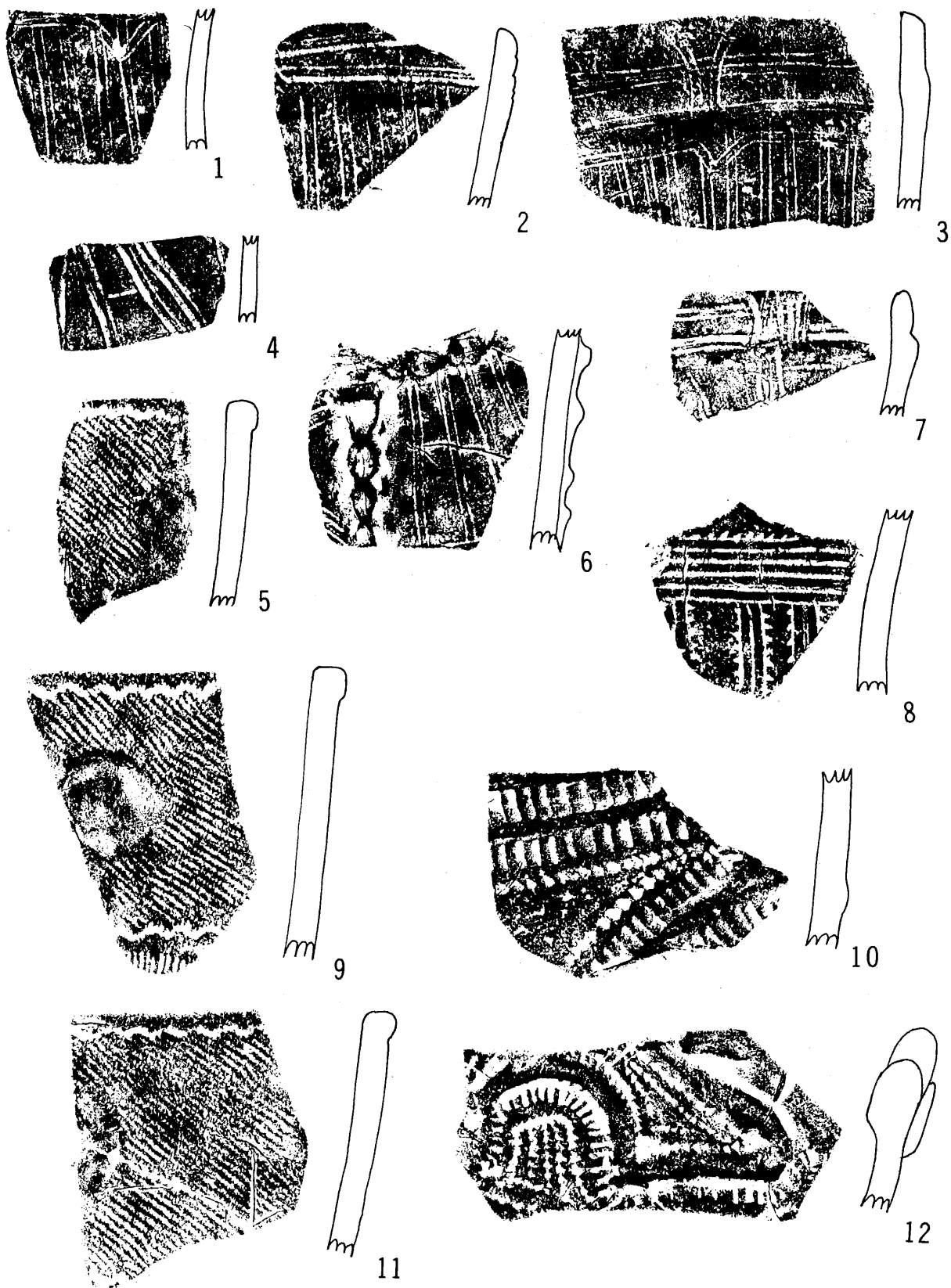


第7図 住居址出土土器実測図(その5) 109号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$

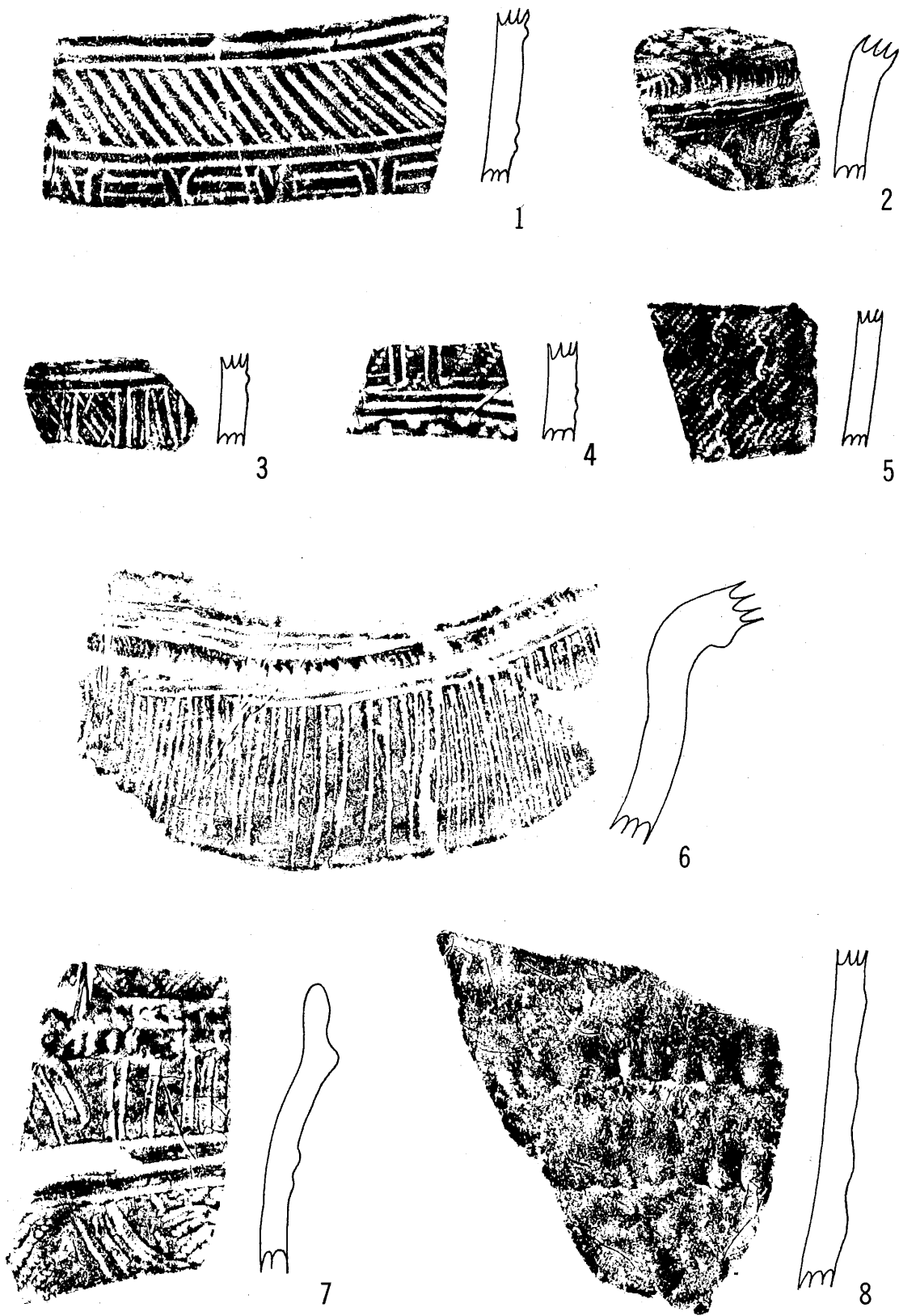


第 8 図 住居址出土土器拓影 (その 1) 78号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$

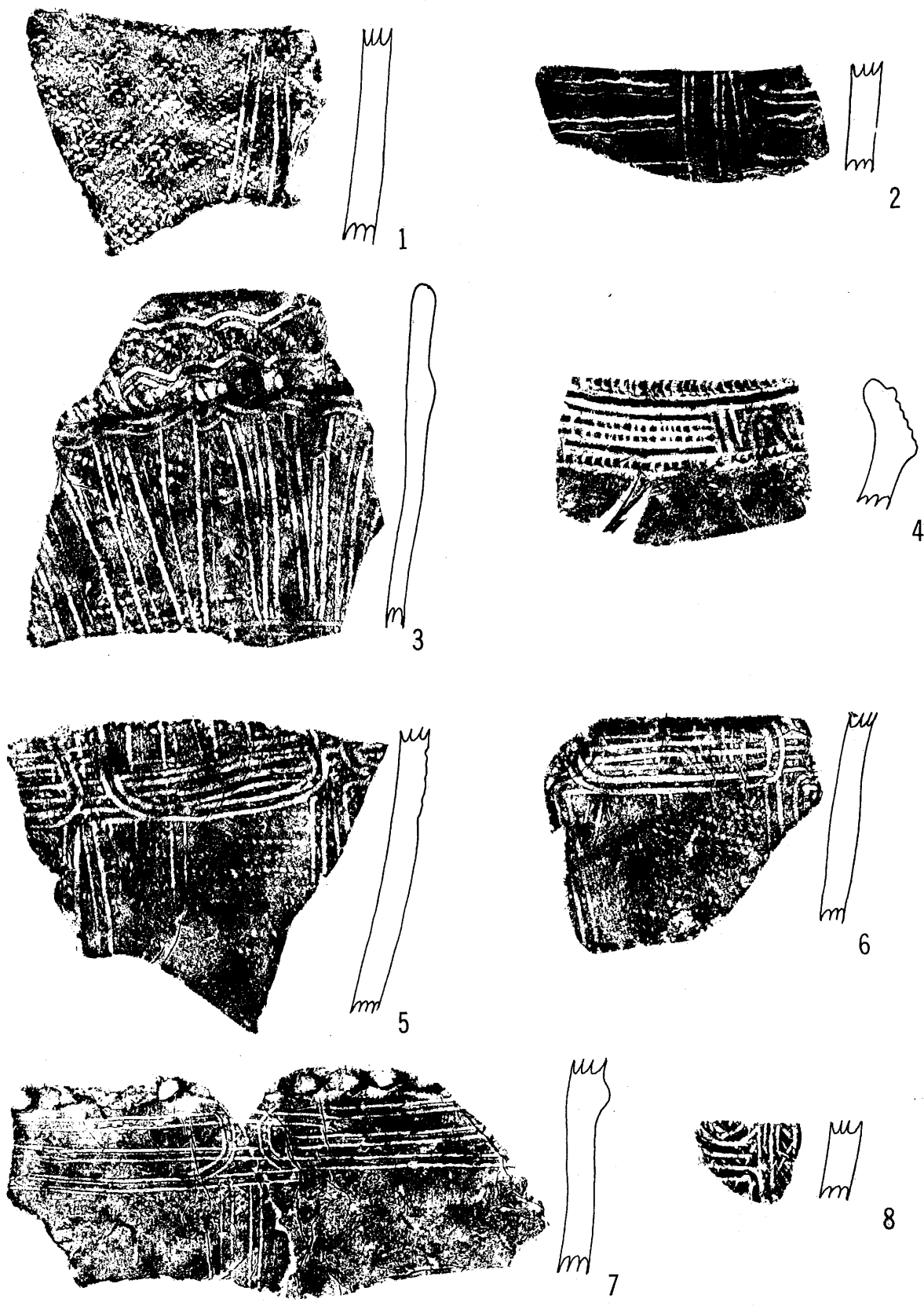




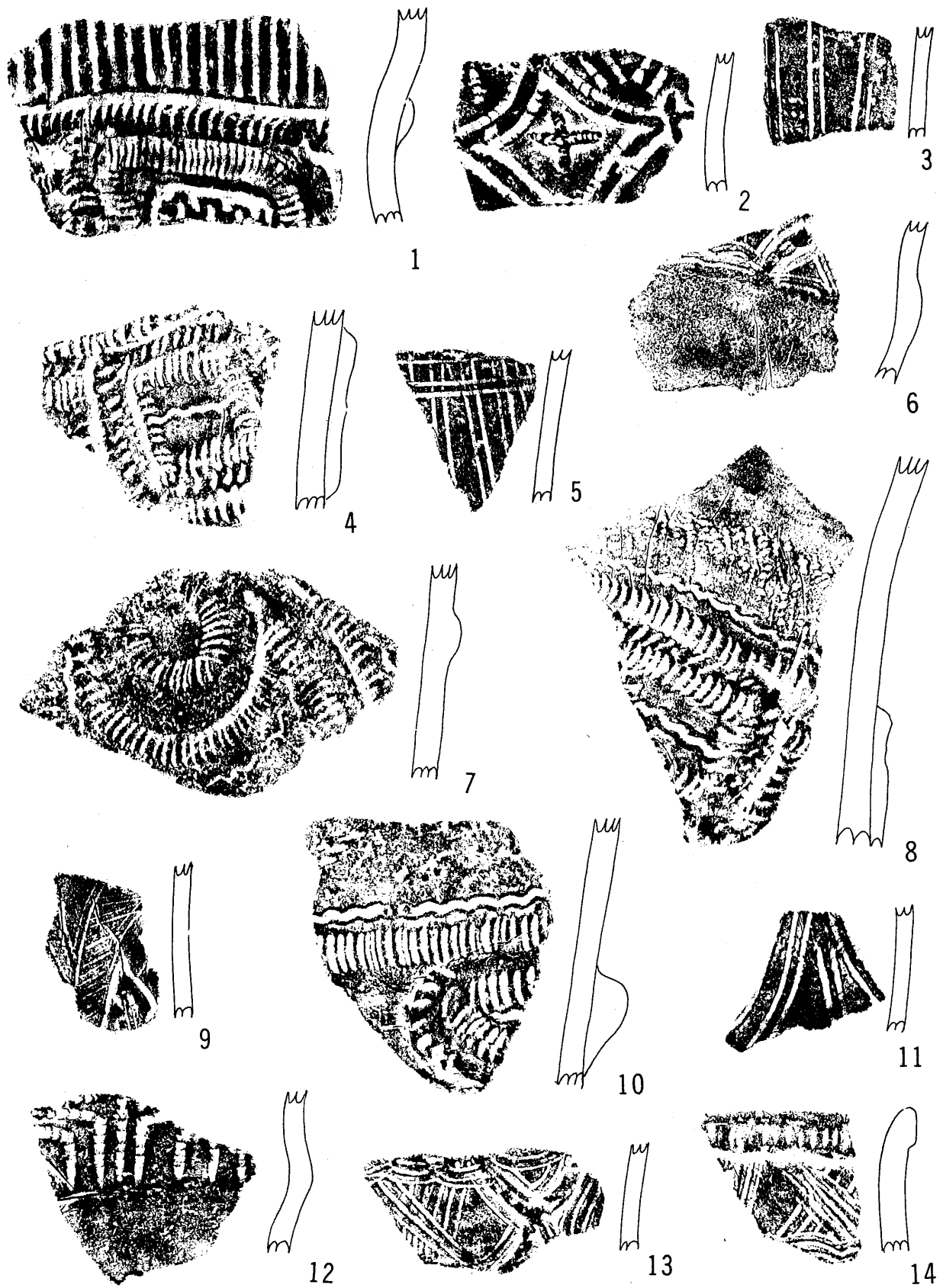
第9図 住居址出土土器拓影(その2) 79号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$



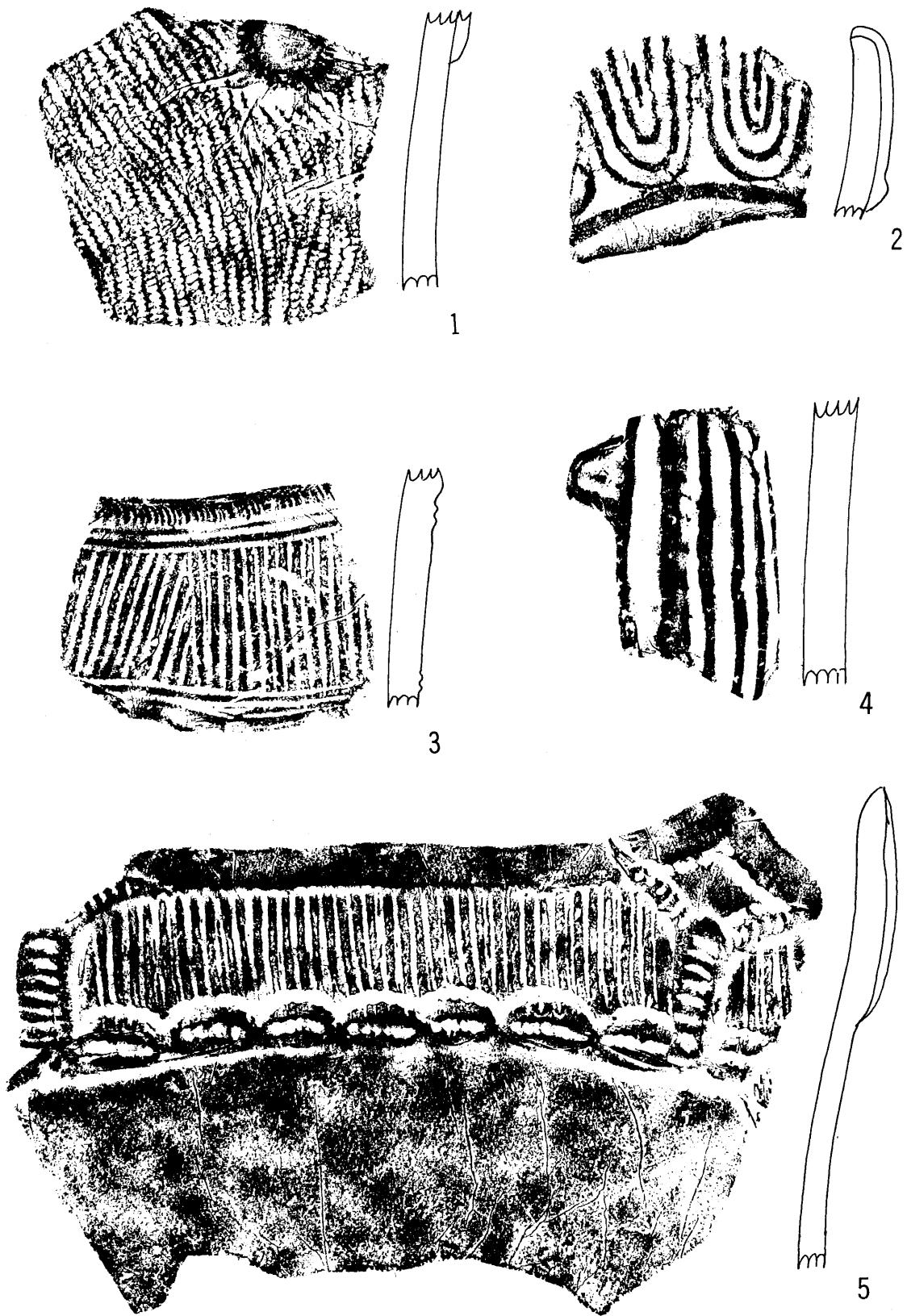
第10図 住居址出土土器拓影(その3) 80号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$



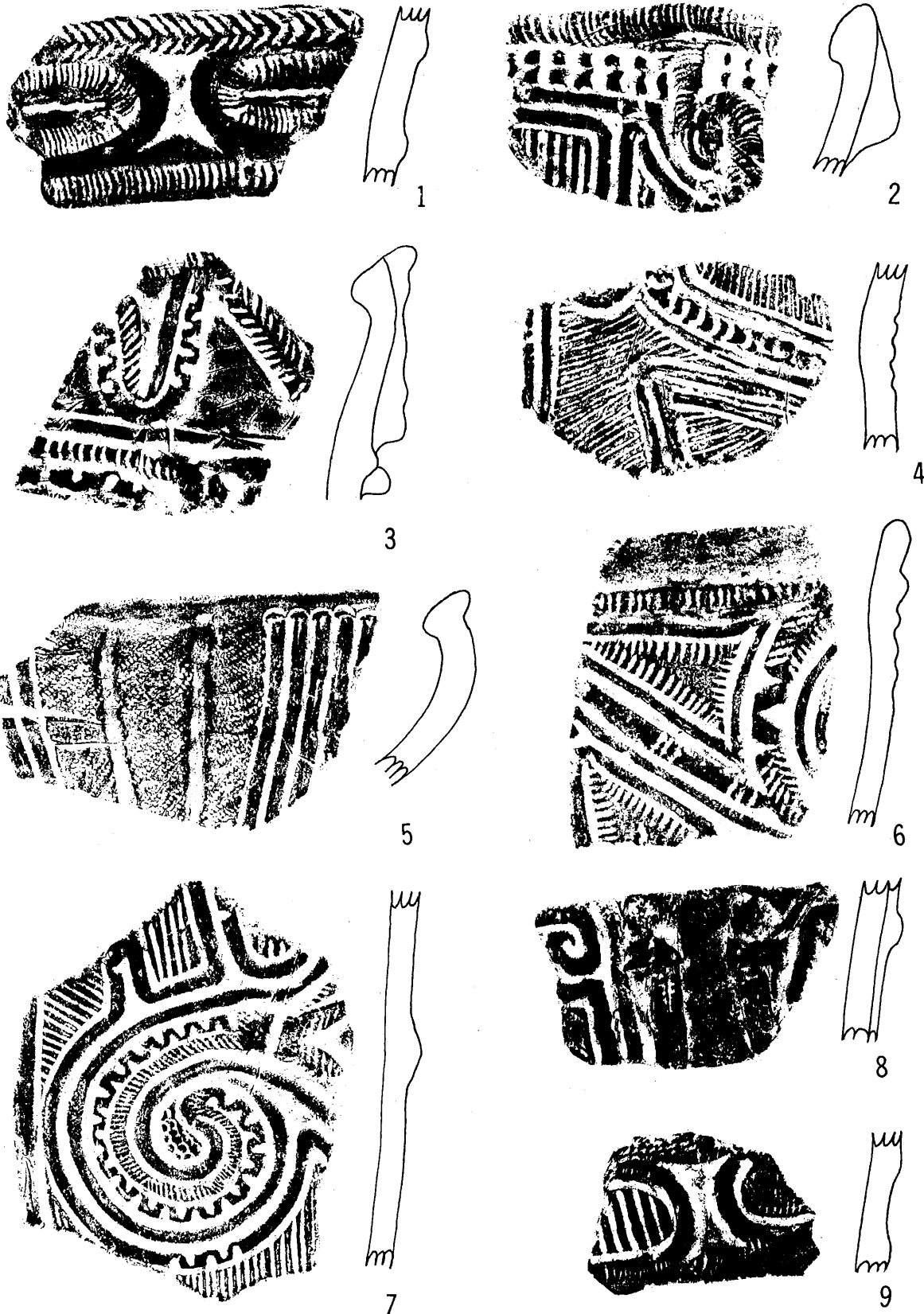
第11図 住居址出土土器拓影(その4) 80号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$



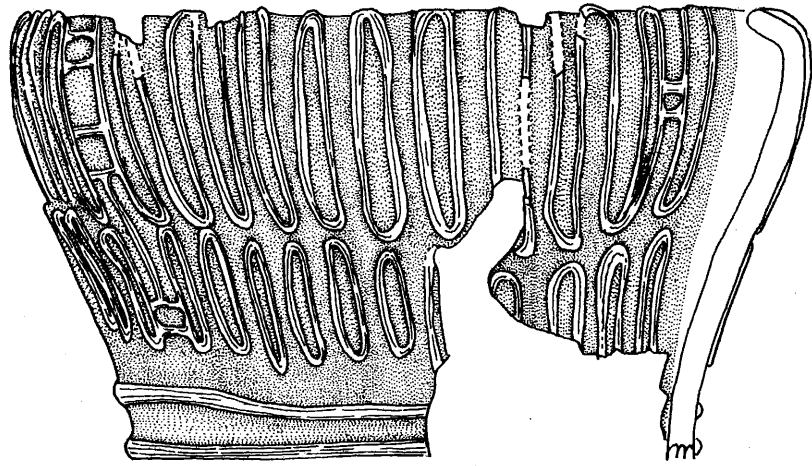
第12図 住居址出土土器拓影(その5) 84号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$



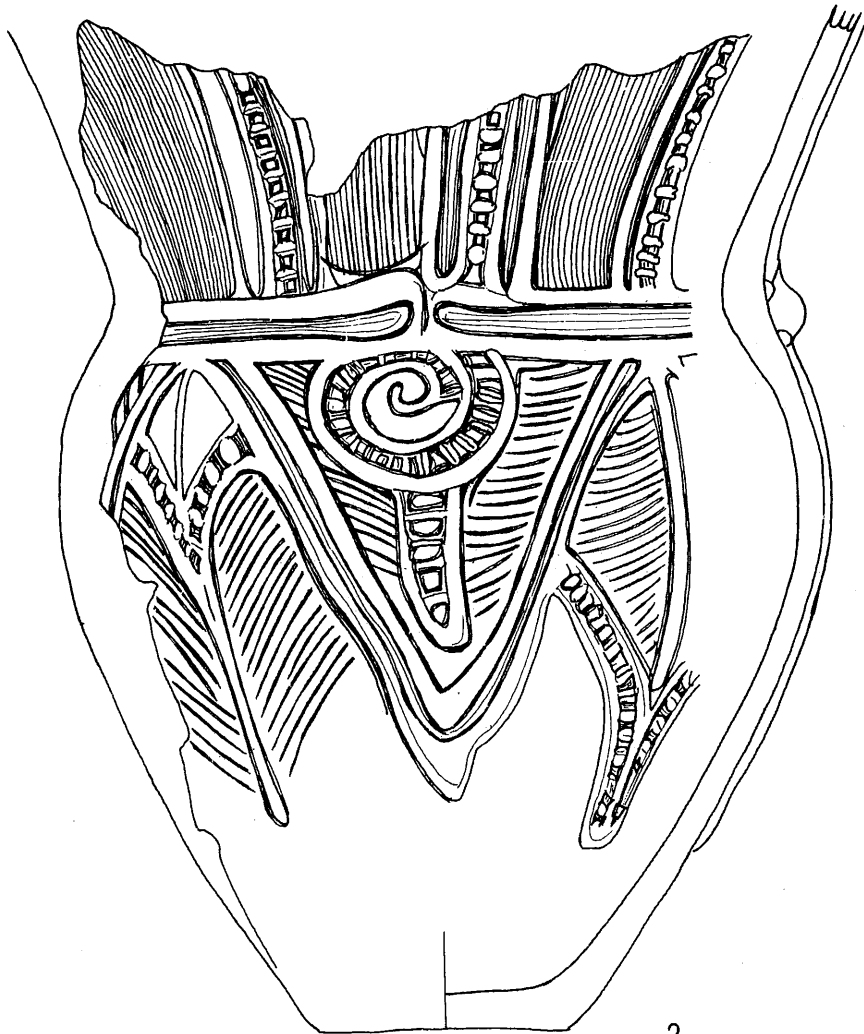
第13図 住居址出土土器拓影（その6）88号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$



第14図 住居址出土土器拓影(その7) 109号住居址 縮尺 $\frac{1}{2}$

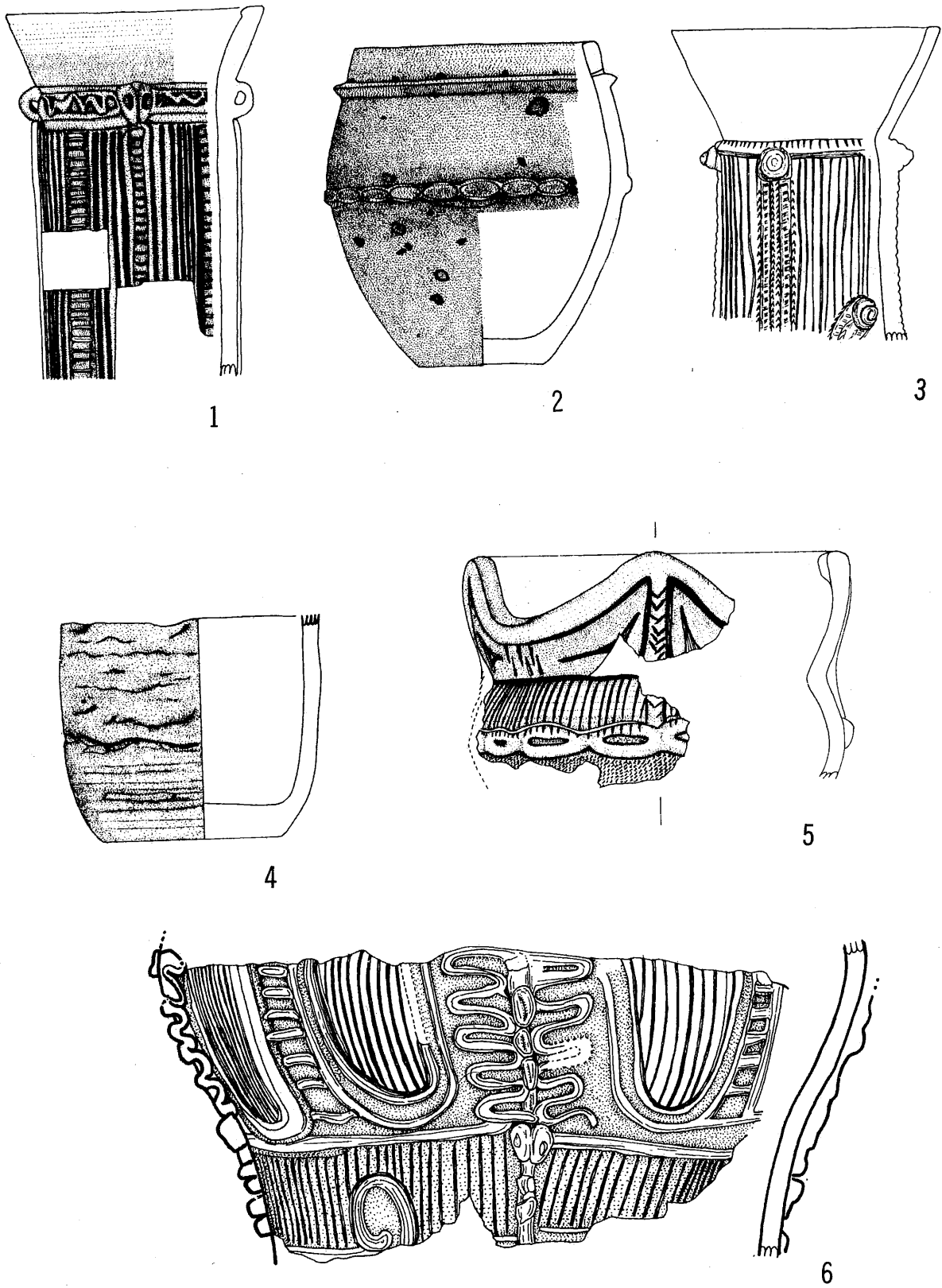


1



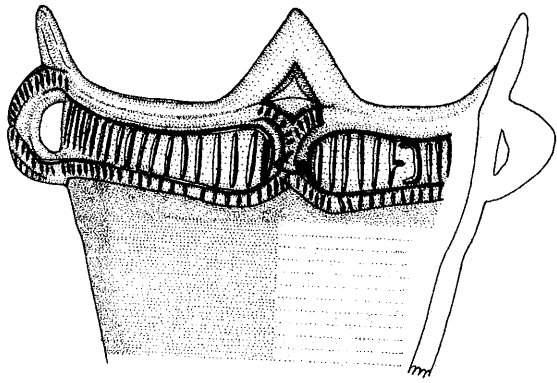
2

第15図 土坑出土土器実測図(その1) 27号土坑 縮尺 $\frac{1}{2}$

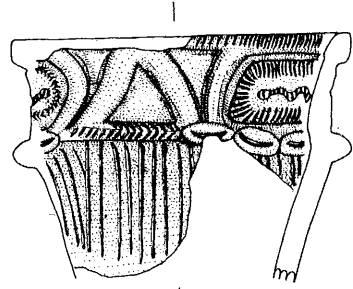


第16図 土坑出土土器実測図（その四） 1—43号土坑， 2—62号土坑， 3—109号土坑， 4—336号土坑，  
 5—337号土坑， 6—525号土坑 縮尺 $\frac{1}{2}$





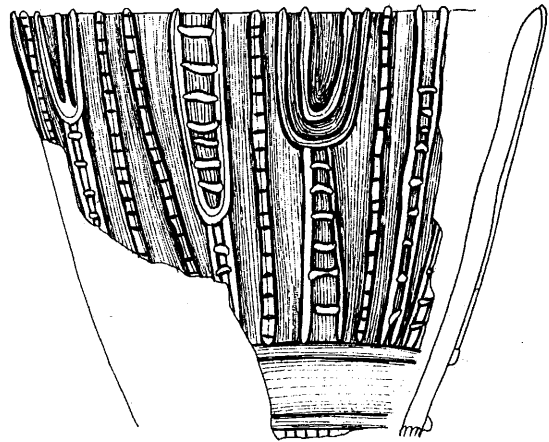
1



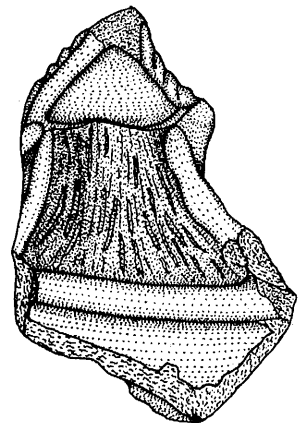
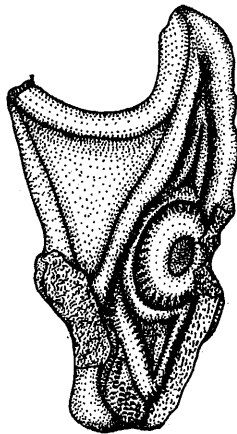
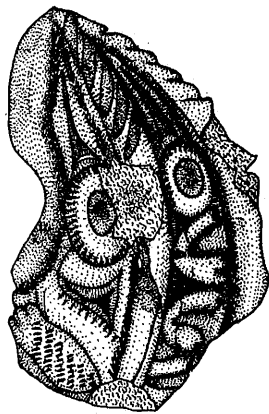
2



3

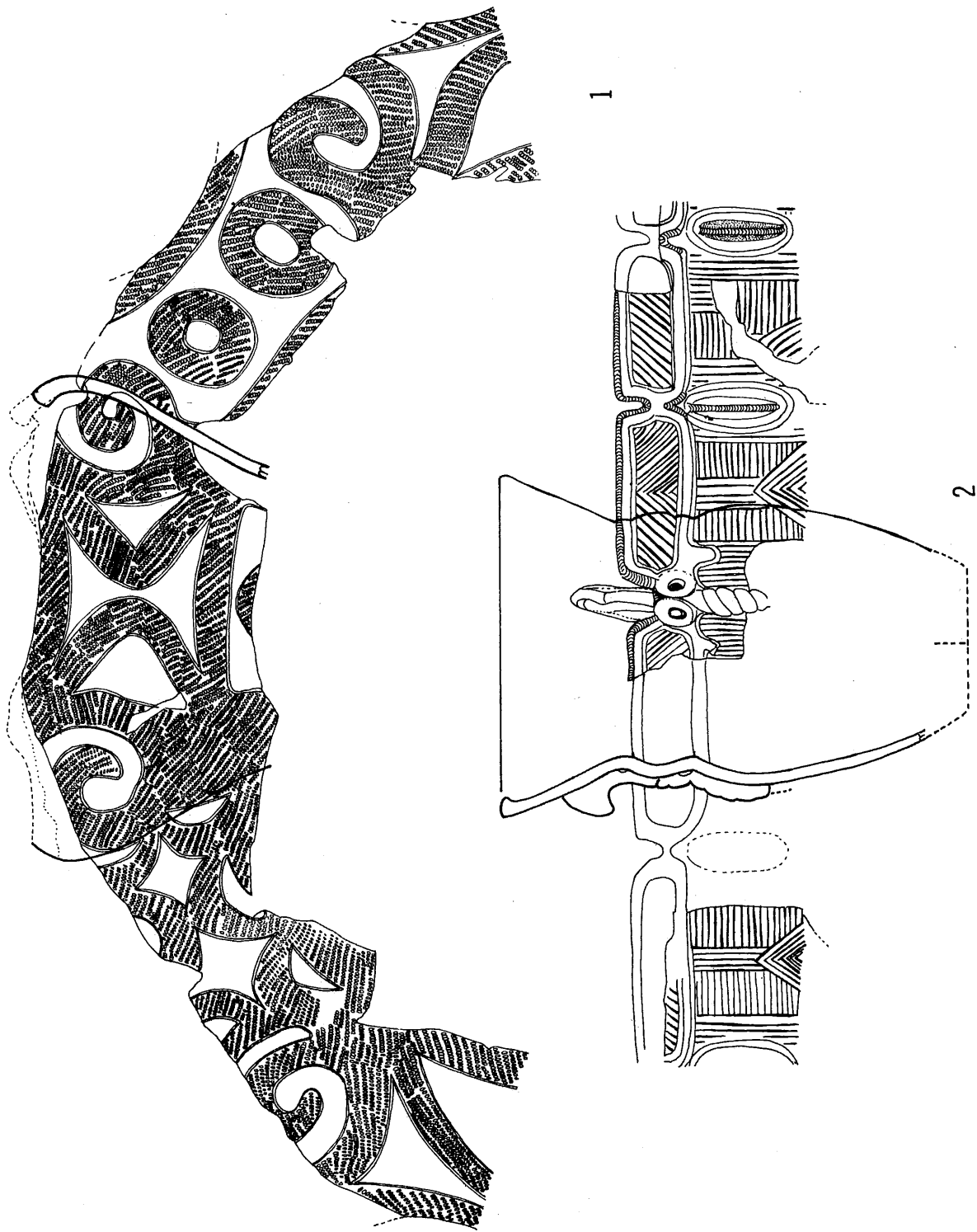


4



5

第17図 土坑出土土器実測図(その3) 1—559号土坑, 2・3—802号土坑, 4—R—25—IIIグリッド, 5—686号土坑. 縮尺 $\frac{1}{2}$  5—のみ $\frac{1}{2}$



第18図 土坂出土土器実測図（その4） 縮尺 $\frac{1}{4}$

### 3. 出土石器

今回発掘した 1,500㎡ の範囲内からは、総数で 417点の石器が出土している。その内訳は遺構内（住居址、土塚）からは 291点を、グリット内からは 126点出土している。

石器の種類は打製石斧、磨製石斧、横刃型石器、凹石、磨石、敵石、石皿、石錘、石錐、打製大型石匙、小型石匙、石鏃等各種にわたっている。特に、横刃型石器の出土総数は56点と、石鏃の少ない点は極だった特徴である。石質に関しては、黒耀石、チャート、緑泥岩、硬砂岩、花崗岩、安山岩等であった。

実測図に示した石器は出土したなかからピックアップしたものの一部である。実測図は第19図から第21図の3枚あげてある。出土箇所は住居址、土塚、グリットである。見方については、1 住居址、2 土塚と同じ方法で参照されたい。

### 4. 土偶・蛇体装飾・石製品

**土偶**は2個検出しており、それは第22図(2～3)である。2は355号土塚、3は405号土塚からそれぞれ出土している。

2は頭部だけ残った状態で、若干、右頭部の一隅が欠損している。土塚内の北壁に密着して倒立の状態で出土した。

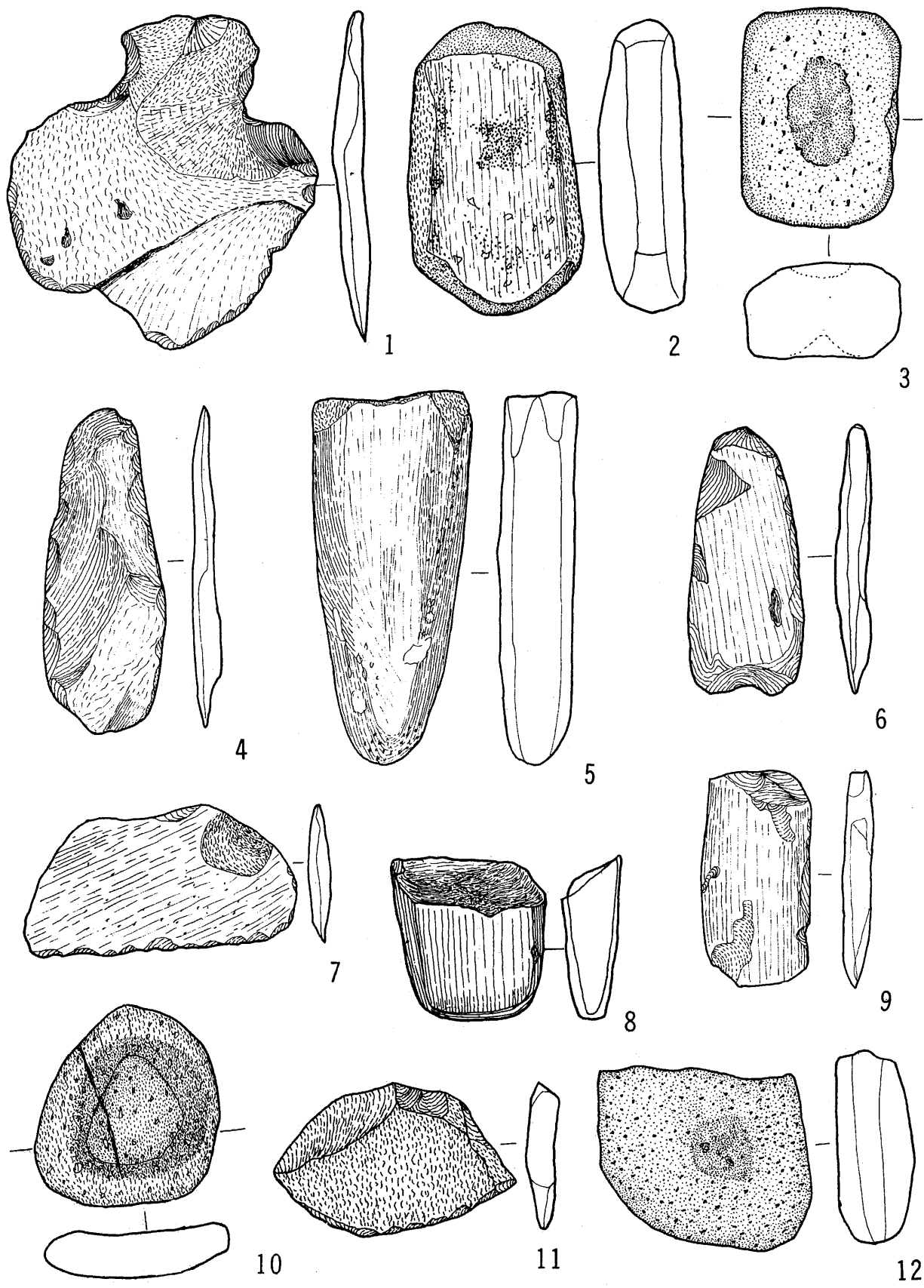
3は小型の土偶で、右足を欠損しているだけで、他の部分は大部分完全な姿で出土したものである。土偶としては乳房の誇大化あるいは腹の大きなことからして妊娠している傾向が強い。したがって、これは女性を象徴した土偶である。

**蛇体装飾**は、3点出土しており、それは同図の(1, 5, 7)であり、1, 5は77号住居址、7は92号住居址から出土している。

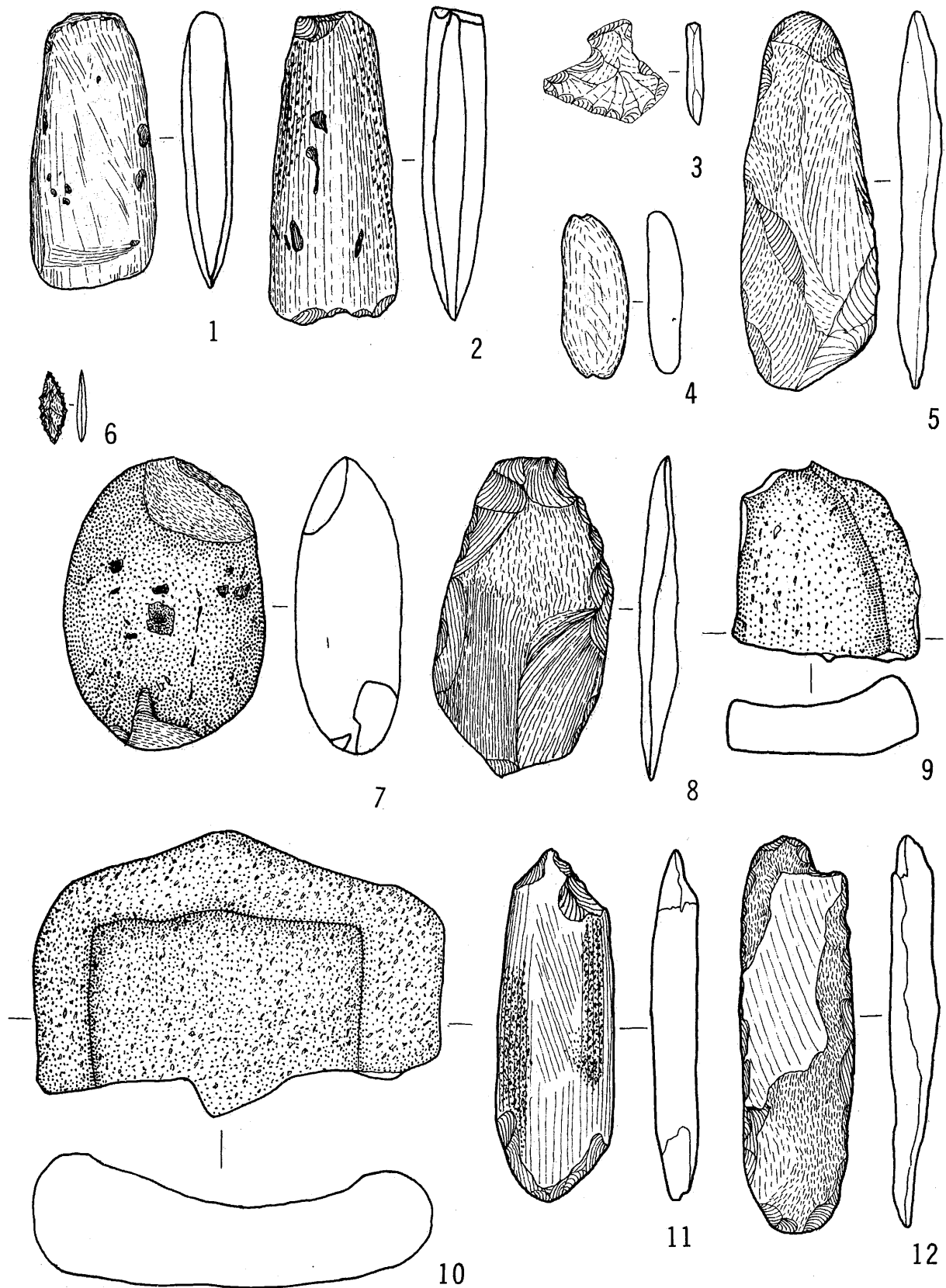
三つの装飾のうち出来具合は1は最も悪く7が最も良好である。これらは全て勝坂期の隆盛期につくられたものである。

**石製品**としてかかげた同図の6は衣冠束帯のときに用いられる石帯である。これは105号住居址のカマドの近く出土した。石質は滑石である。

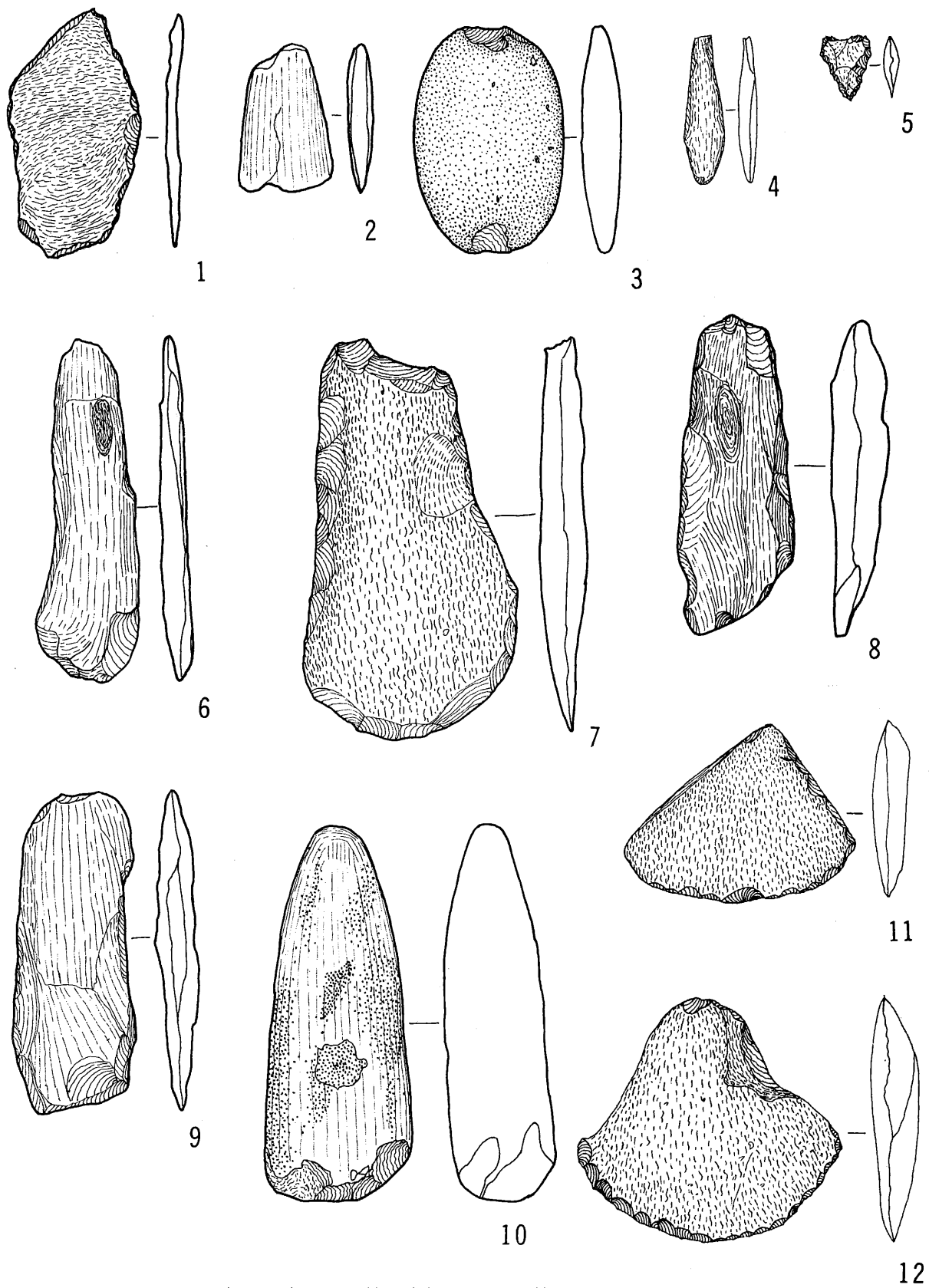
伊那市内に於いては、福島遺跡について2番目の出土である。 (小池政美)



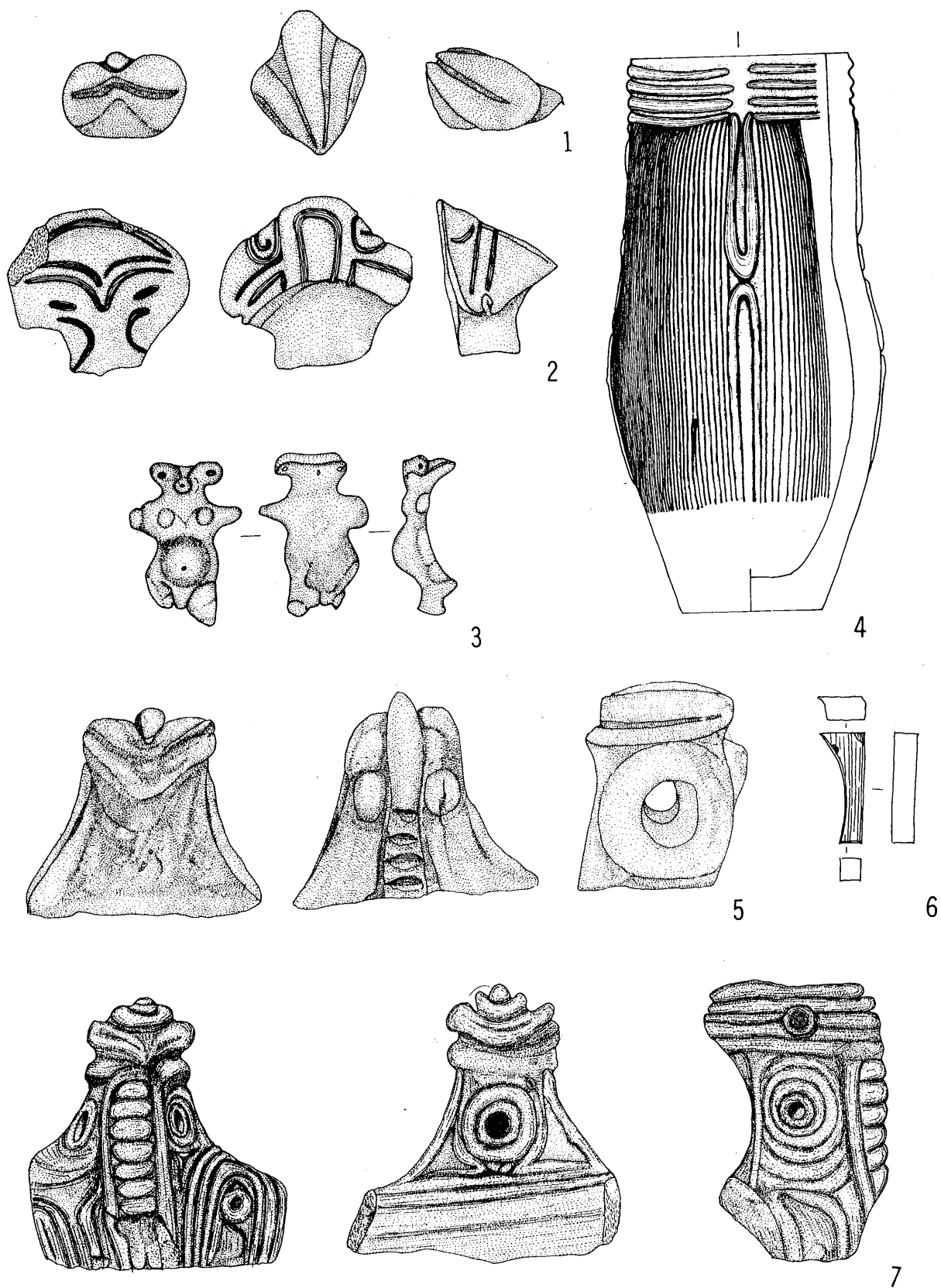
第19図 石器実測図(その1) 1—162号土坑出土, 2—180号土坑出土, 3—241号土坑出土, 4—210号土坑出土, 5—214号土坑出土, 6—215号土坑出土, 7—227号土坑出土, 8—241号土坑出土, 9—292号土坑出土, 10—315号土坑出土, 11—381号土坑出土, 12—301号土坑出土, 縮尺 $\frac{1}{2}$  10—のみ $\frac{1}{4}$



第20図 石器実測図（その2） 1～2—335号土坑出土， 3—333号土坑出土， 4—403号土坑出土，  
 5—381号土坑出土， 6—438号土坑出土， 7—406号坑出土， 8—409号土坑出土， 9—480号土坑  
 出土， 10—802号土坑出土， 11—762号土坑出土， 12—690号土坑出土。 縮尺 $\frac{1}{2}$  10—のみ $\frac{1}{4}$



第21図 石器実測図(その3) 1—12号土塚出土, 2—43号土塚出土, 3—45号土塚出土, 4—68号土塚出土, 5—73号土塚出土, 6~9—111号住居址出土, 10—108号土塚出土, 11~12—グリッド出土, 縮尺 $\frac{1}{2}$



第22図 土偶・蛇体裝飾石製品実測図 1—77号住居址出土。2—335号土塚出土。3—405号土塚出土  
 4—23号土塚出土。5—77号住居址出土。6—105号住居址出土。7—92号住居址出土。縮尺 $\frac{1}{2}$   
 4—のみ $\frac{1}{3}$

## V 所 見

今回の第Ⅲ次発掘調査の発掘区域は、第Ⅰ次調査区に北接した区域で、その際、月見松遺跡の中心部で最重要部分であるとして現状保存された区域約 7,000平方mであった。

予察に違わず縄文時代の遺構が密集状態で露呈されてきたため計画を中途で変更し、北部 3,000平方m を発掘し南部4,000平方m は、工事設計を変更して水田下に埋没させて現状保存を計ることとした。

全面発掘された 2,400平方m（南北40m・東西60m）の範囲内からは、縄文中期に所属する竪穴住居址42軒及び土塚 886基、平安時代に所属する竪穴住居址 1 軒が検出されその複綜、展開ぶりさまことに見るものがあり、まさに大遺跡の中心部分にふさわしい状況であった。それは一言で言えば、縄文時代中期に所属する直径40m以上の範囲に楕円状に展開した土塚群の 1 部886基の群集と、それをとり囲むようにその東南縁に展開した竪穴住居址42軒の集合であった。これらの学問的考察については、資料の詳細な検討や分析の手つづきを経ていない段階であるので、とりあえず発掘調査を通じて得られた二、三の所見を記し今後の考察のための資としたい。

1. 土塚群についてであるが、発掘区のほぼ三分の二の範囲にわたって展開している土塚 886基のうち、遺物を伴出したもの 208基、立石、配石、小柱穴などの施設を伴ったもの 175基であった。詳細は第 2 表に掲げてあるので参照されたい。

まず配石を伴うものを細分すると次のようになる。

- ① 第42号土塚の如く平石を塚内に石棺状に組んだもの。
- ② 第349号土塚の如く、平石を覆土上面に配石したり、組み合せたもの。
- ③ 第545号、551号、691号の各土塚の如く塚底に数箇の礫を並べたり、置いたりするもの。
- ④ 第109号、第139号土塚の如く立石を伴ったもの。

また遺物を伴ったものは次のように分類できる。

- ① 第 5 号土塚の如く、大小 3 箇の土器を「入れ子」状に重ねて正位においたもの。
- ② 第53号、第241号、第525号土塚の如く埋甕状に塚内に正位で埋めたもので、第99号土塚内の土器は底部を抜いてあった。
- ③ 第27号土塚の如く、3 箇体の土器を破片にして塚底に敷きつめたもの。
- ④ 数片の土器破片が塚底や堆土内にあるもの。これは一般的で数が多い、他に石斧と共伴したり石斧を単独に埋めたものがある。なかでも第321号土塚は土器片に石冠状石器が伴っている。
- ⑤ 第 125号例、第 232号例の如く骨片を伴うもの。



土塚の形態としては、直径 1.5m～2m 内外の不整楕円形のものが一般的であるが直径 4m を超えるものや長楕円形のものもある。断面形は直壁のものが一般的であるが、袋状のものや鉢状のものもある。したがって次のように分類できる。

- ① タライ形を呈するもので数が多い。
- ② ドラム缶形を呈するもの。
- ③ 袋形を呈するものでやゝ多い。

次に土塚群の形態であるが、全体に散布した状態ではなく、20基～30基内外が1群となって長楕円形の群を構成し、それが20群余り接続しつつ展開しているのである。土塚群の全容が露呈されたのではなく、その1部の四分の一分角の範囲が検出されただけであるが、全体が小さな小グループに分けられるものと推定され得るのである。

以上、土塚群について述べたが、最後に土塚の性格は何かという点について触れたい。

前述の分類に加えて、小グループの土塚は大部分が互いに切り合いながら接続している点から見て同時的でなく、次々と若干の時間を置いて造られていったことが看取できるのである。これらの点から土塚は埋葬用の墓塚ではなかったかと思われるのである。このような観点から今後の精査を進めていきたい。

なお土塚の所属時期について施文の明確な土器片を出土した 180基の土塚について分類してみると次のようである。下島直後形式 1 基、梨久保式 2 基、月見松 1 式 29 基、猪沢式 10 基、新道式 11 基、藤内式 41 基、井戸尻式 87 基、曾利期 2 基、加曾利 B 期 1 基、中期不詳 6 基であって前期末から中期初頭にかけての時期に土塚が造られ始め、次第に発展し中期中葉に至って最盛期に達し、未葉に入るとほとんど衰退したことを物語っている。

**2. 住居址群**についてであるが、その占める位置は主として、土塚群の北東から西南の縁辺にかけて孤状に並列展開しているがその数 42 軒を数えた。なおこれにひきつづいて東方から南方にかけて 200m の範囲は住居址が密接状態で展開していることが、前次調査の結果から推定できた。

発掘された 42 箇の住居址のうち国分期 1 軒を除いた 41 軒は、ほとんど縄文時代中期に所属する住居址である。これを細分すると、下島直後形式期 2 軒、月見松 1 式期 1 軒、九兵衛尾根式期 2 軒、新道式期 5 軒、藤内式期 13 軒、井戸尻式期 8 軒、曾利 1 式期 7 軒、中期不詳 2 軒となる。

この状況からみると、中期中葉に属する住居址が大半を占めていることになる。第 1 次調査の際は中期初頭と未葉のものが多く、中葉の住居址は至って少かったのであるが、今回はその逆の傾向を示した。この点中期各時期の居住立地が一遺跡のなかで分明していて興味深い。

また第 1 次調査の際、伊那谷の縄文時代中期の編年として月見松 I 式から VII 式まで設定したが、今次調査により大修正を加えるべき資料が出土した。特に井戸尻式期については、八ヶ岳南麓の編年とはだいぶ様相を異にしており、まだ細分の余地が残されている状態である。今後

の精査はこの点についても十分な観点をもって進めていきたい。

**3. 土塚群と住居址群との関係**についてであるが、前述のとおり土塚群と住居址群のそれぞれの成立時期を細分してみるとほぼ同時期であることが確かめられた。特に土塚群を囲む住居址群は2重の孤を画いている。最近調査をした遺跡で土塚群と住居址群が一括発掘されたのは長野県中央道遺跡調査の中における上伊那郡飯島町鳴尾遺跡、尾越遺跡、山溝遺跡の発掘調査である。これらの例はいずれも小規模ながら住居址群に接した北または北西方に土塚群が位置している。しかも土塚群はほぼ円形を呈して展開しているのであるが、本遺跡は発掘区内では扇形を呈しているが、まだ西方から北方の地域に接続していることが、西側地層断面から看取された。現状で800余基であるからその土塚全数は3,000基を越えるものと推定される。その東南縁辺において住居址群が2重の孤を画いて展開しているが外側の住居址群は土塚の縁辺に並び、内側の住居址群は土塚群を切って造成されている。外側のグループはすべて縄文中期の初頭から中葉に至るものである。加えてこの時期のものは土塚群の内部に切りこんではいない。

内側の住居址群は、第70号址、第101号址、第98号址、第104号址、第102号址の5住居址であるが、第104号と第102号址は井戸尻Ⅲ式と見られ他の住居址は未葉の曾利Ⅰ式である。この現象は、中期初頭から中葉にかけての時期は土塚群地域を画然と区別していたことをもの語ってしよう。仮に土塚を墓塚とすれば、墓域と住宅区とを明確に意識していたといえよう。これに反して未葉の曾利期になると墓域の中に住居を建設するようになり、明らかに墓域に対する意識の欠除を示しているのである。関東編年のいわゆる勝坂式期と、加曾利E式期における土器型式の相違より、より以上に意識の相違が見られるのはまことに興味深い。今後の精査はこれを観点として更に追求していきたい。

**4. 遺跡の規模とその保護**についてであるが、第1次調査の報告において、筆者は月見松遺跡の規模を調査結果の諸条件から推定して、東西600m、南北250m計150,000平方mの範囲の規模をもち、約600軒以上の竪穴住居址が存在するものとした。1次調査の結果を概算して100平方mに一軒の割合としたのであるが、今次調査においては更にその密度は高まり30平方mに1軒の割合でありこの点からも中心部であることが明確である。第2次調査は、今次発掘地点の300m東方寄りの遺跡の最東端部に当る地点が発掘されたが600平方mに1軒の割合でその密度は疎であった。この状況から全体数を推定した調査者は、前述の月見松遺跡の規模の見積りは過大すぎるとして批判しているが、今次調査の結果からみても決して過大なものとは思われないのである。

発掘の途中で遺構の過密さに驚いた関係者は協議の結果、設計を変更して発掘予定区の大半を発掘することなく、水田床面下に埋蔵させる工事を施すこととした。もちろん最終的には発掘区も同様水田下に破壊することなく埋没させたのである。さらに今回の調査で判明したことは、この原地形が西方から東方に向かって30分の1の勾配をもっていることから、第1次の水

田化工事において大部分が破壊をまぬがれていることである。もちろん前述の通り第1次調査の際も20,000平方mを水田下に埋存させ今回も6,000平方mを加えた。それ以外に破壊は水田化した処で各水田の西側の部分が削られただけであり、破壊は部分的である。原地表は変貌したけれども、その包蔵する内容の重要性を重要視し、今後の保護策について十分検討されるよう望みたい。

なお、本遺跡の重要性はその位置にある。第1図に示した如く扇状地の中央部に位置する本遺跡を中心とした径5,000mの円形の範囲内に縄文時代中期の遺跡はほとんど存在せず、その周辺に密集している状態である。縄文時代の集落と集落の相互関係、経済関係を追求するうえに重要な性格をもつものである。この意味においても、その保護について万全を期するよう切に願ってやまない次第である。

以上とり敢えず発掘の所見について記したが、今後、詳細な資料調査検討を加え、改めて本格的な発掘報告書を刊行することをお誓いして擱筆したい。

終りに臨み、文化庁ならびに県教育委員会文化課、および伊那市教育委員会社会教育課の関係者の方に手厚い御配慮と御指導を頂いたことを深謝し、深く敬意を捧ぐる次第である。

(林 茂 樹)

# 版 圖

第96号住居址

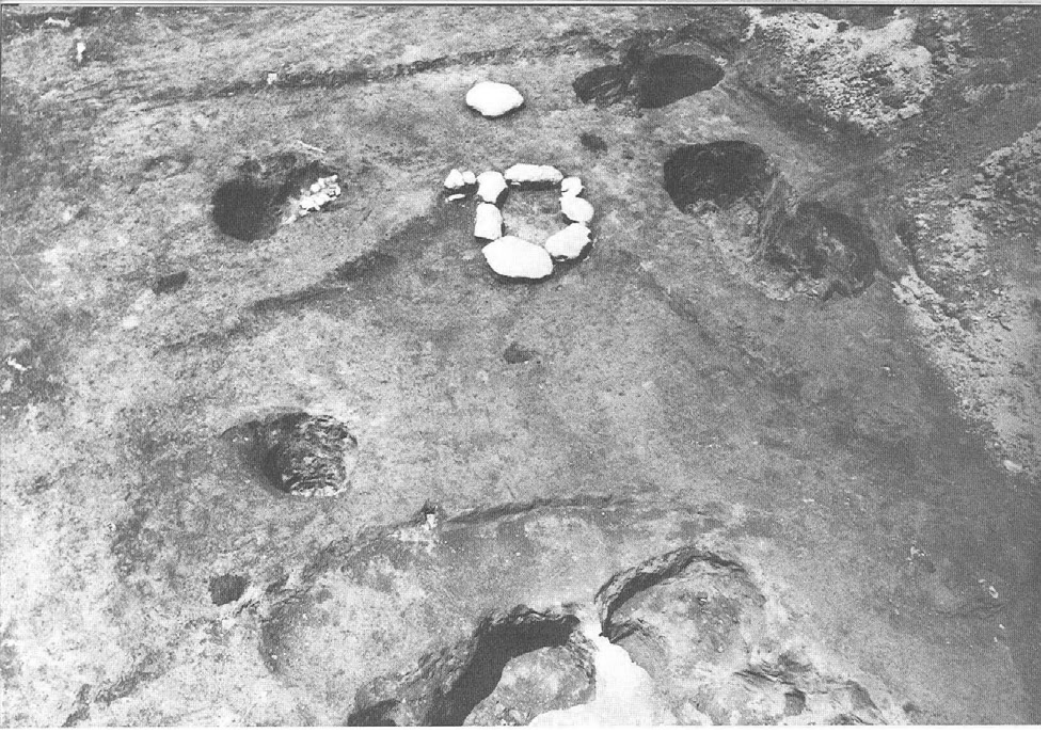


第97号住居址



第98号住居址





第100号住居址

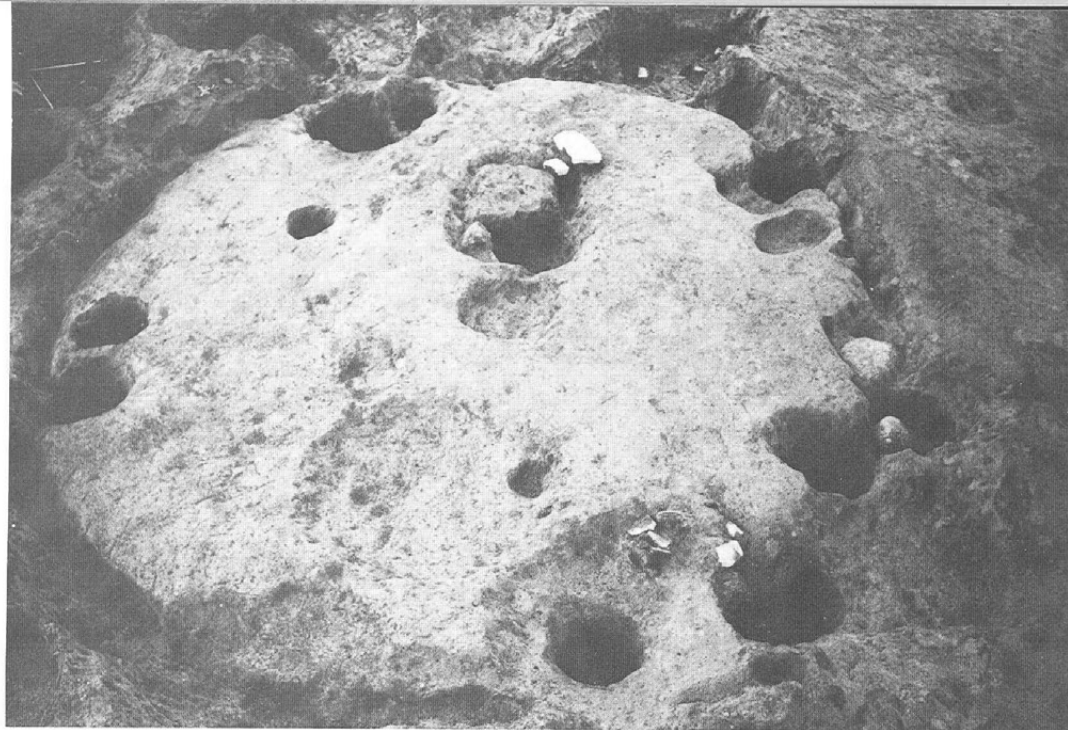


第101号住居址

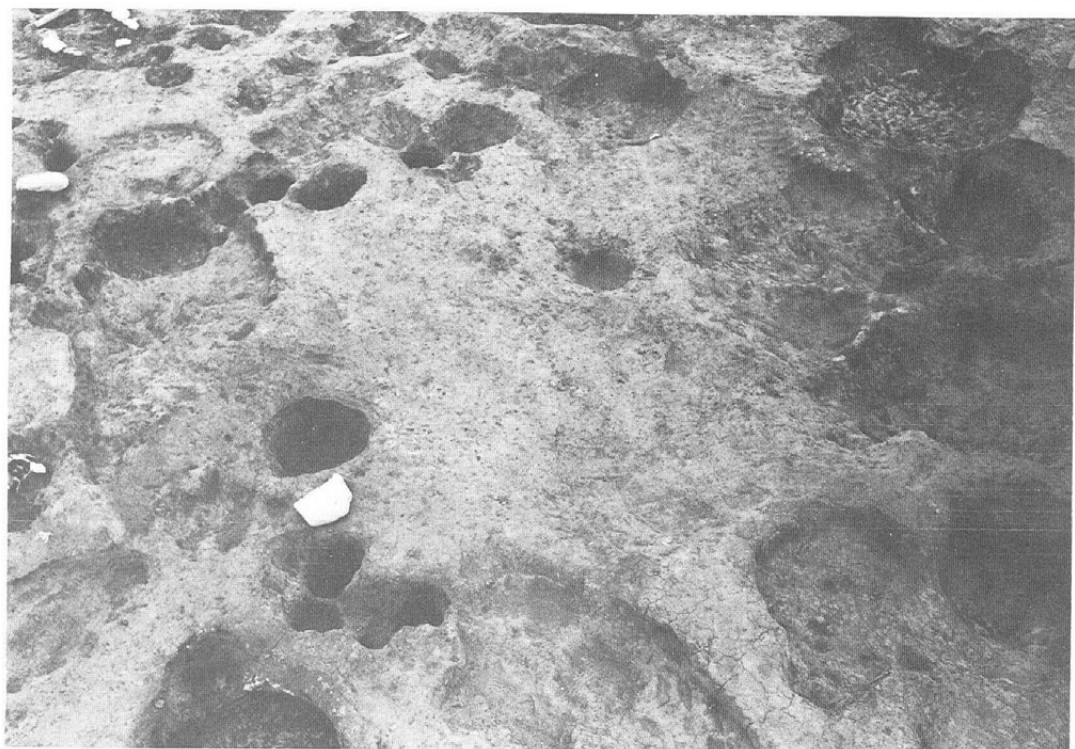


第102号住居址

第103号住居址

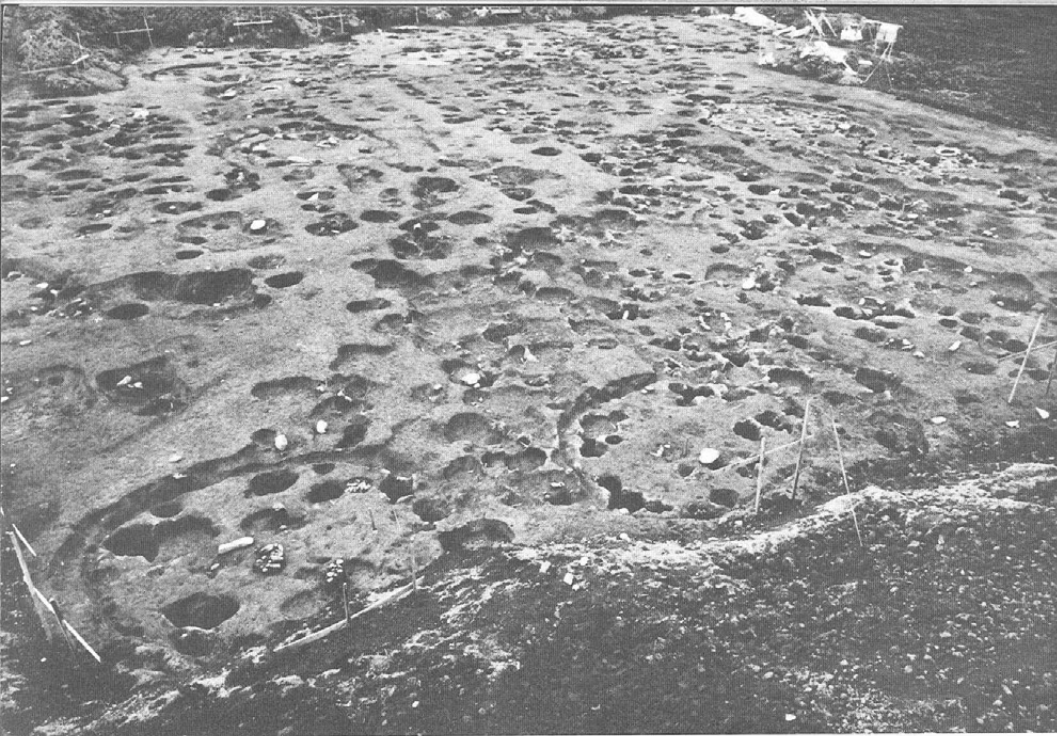


第104号住居址

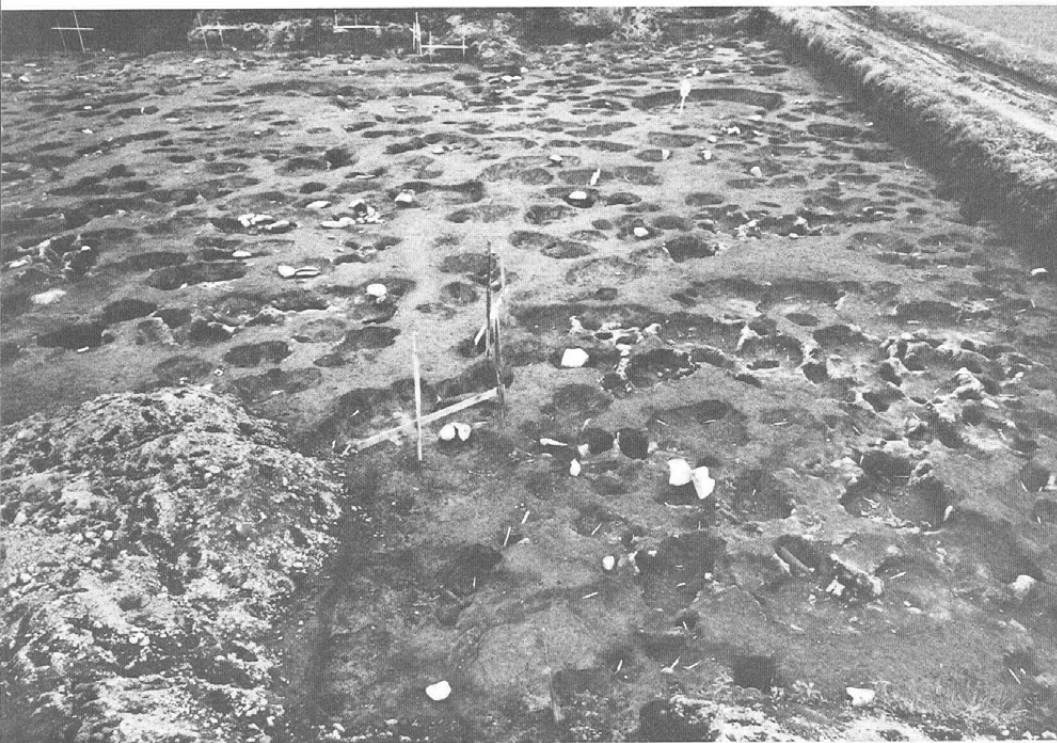


第106.107号住居址

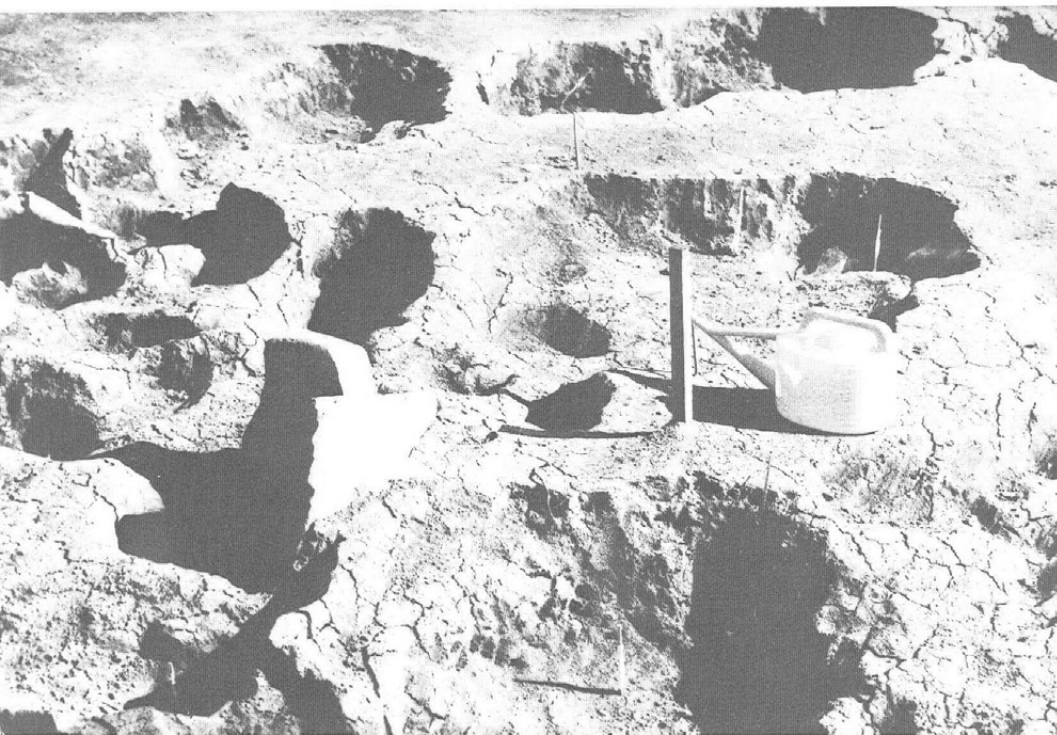




土壇群の全景南から

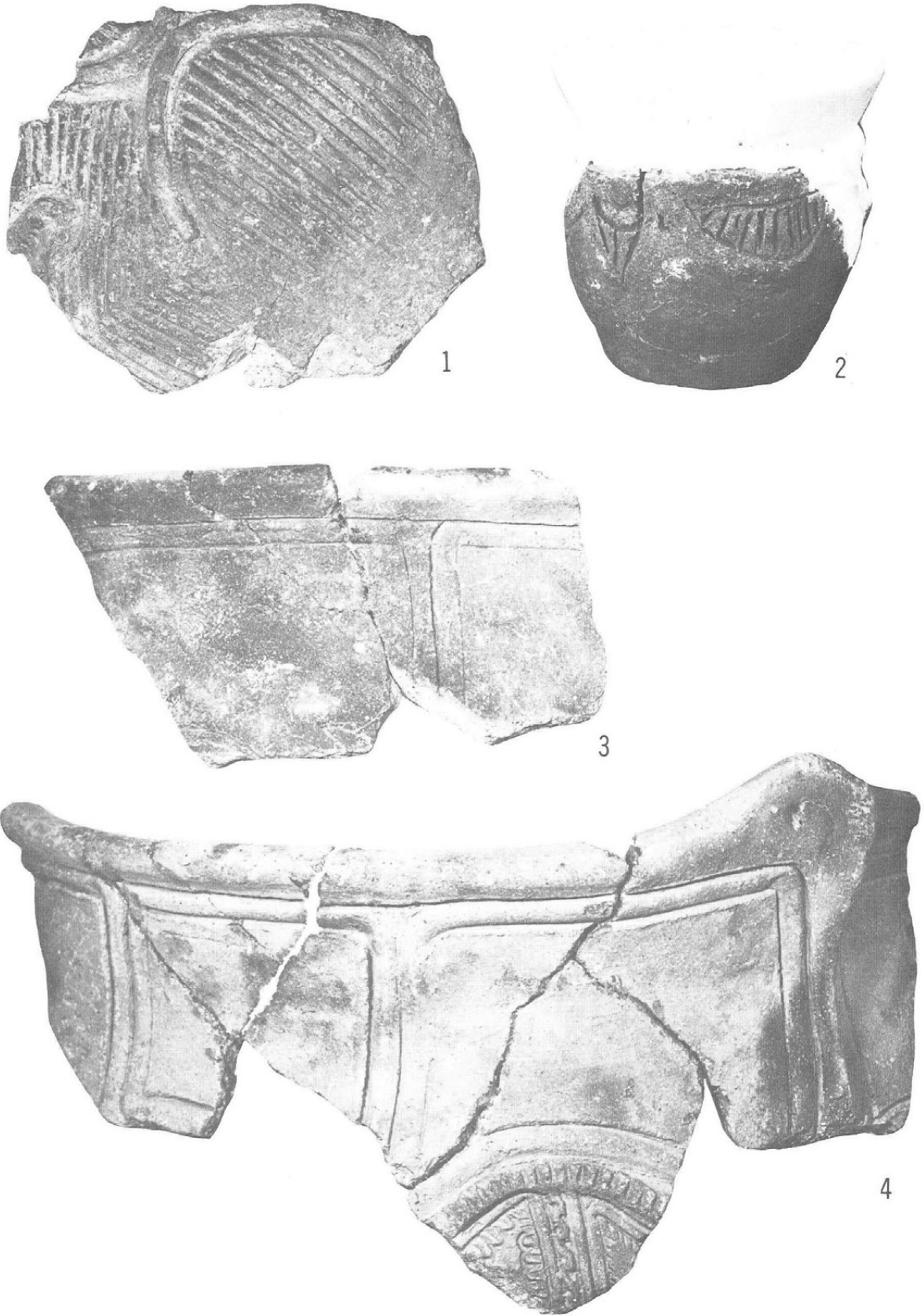


土壇群の全景北から

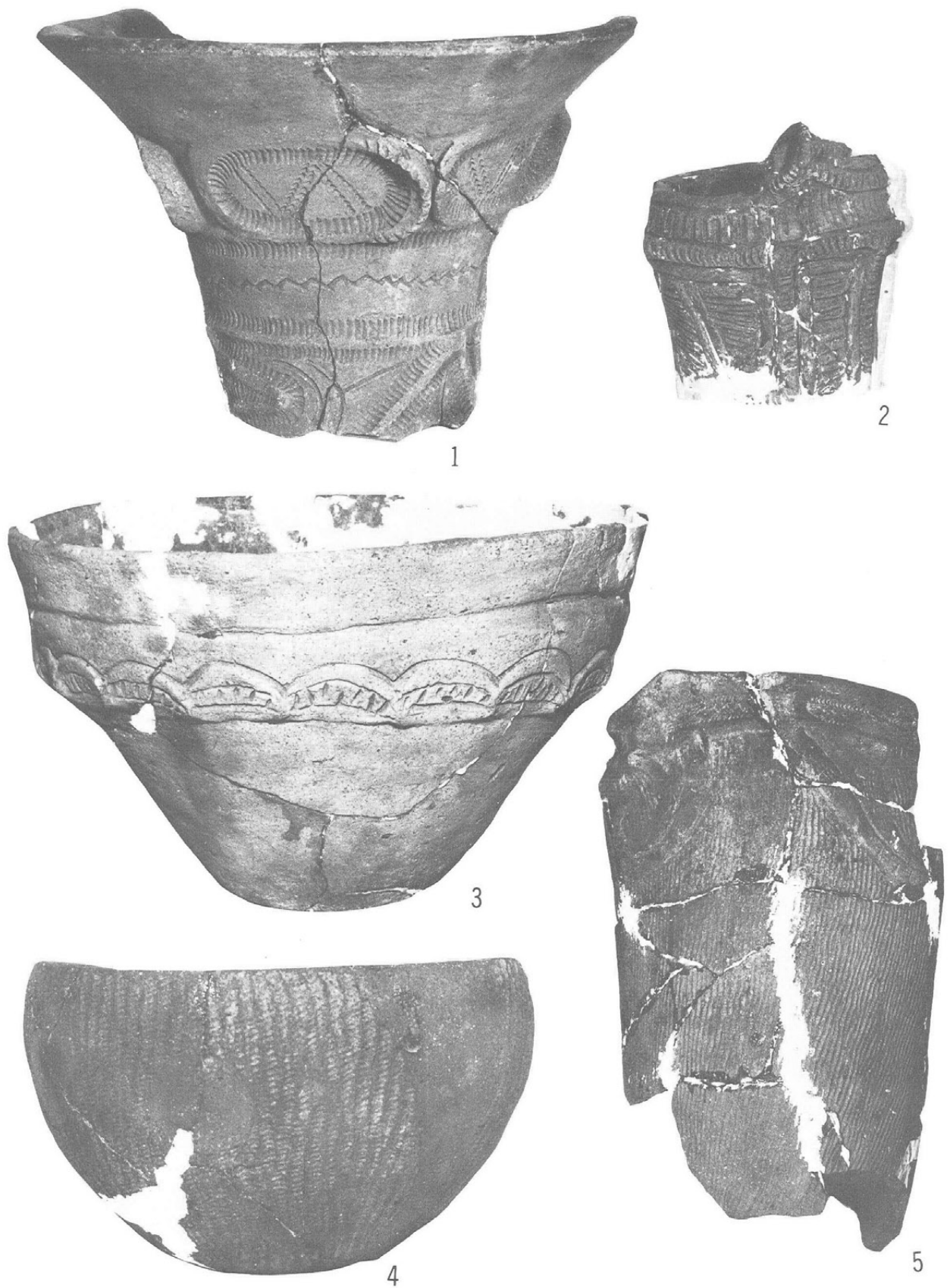


土壇群近景

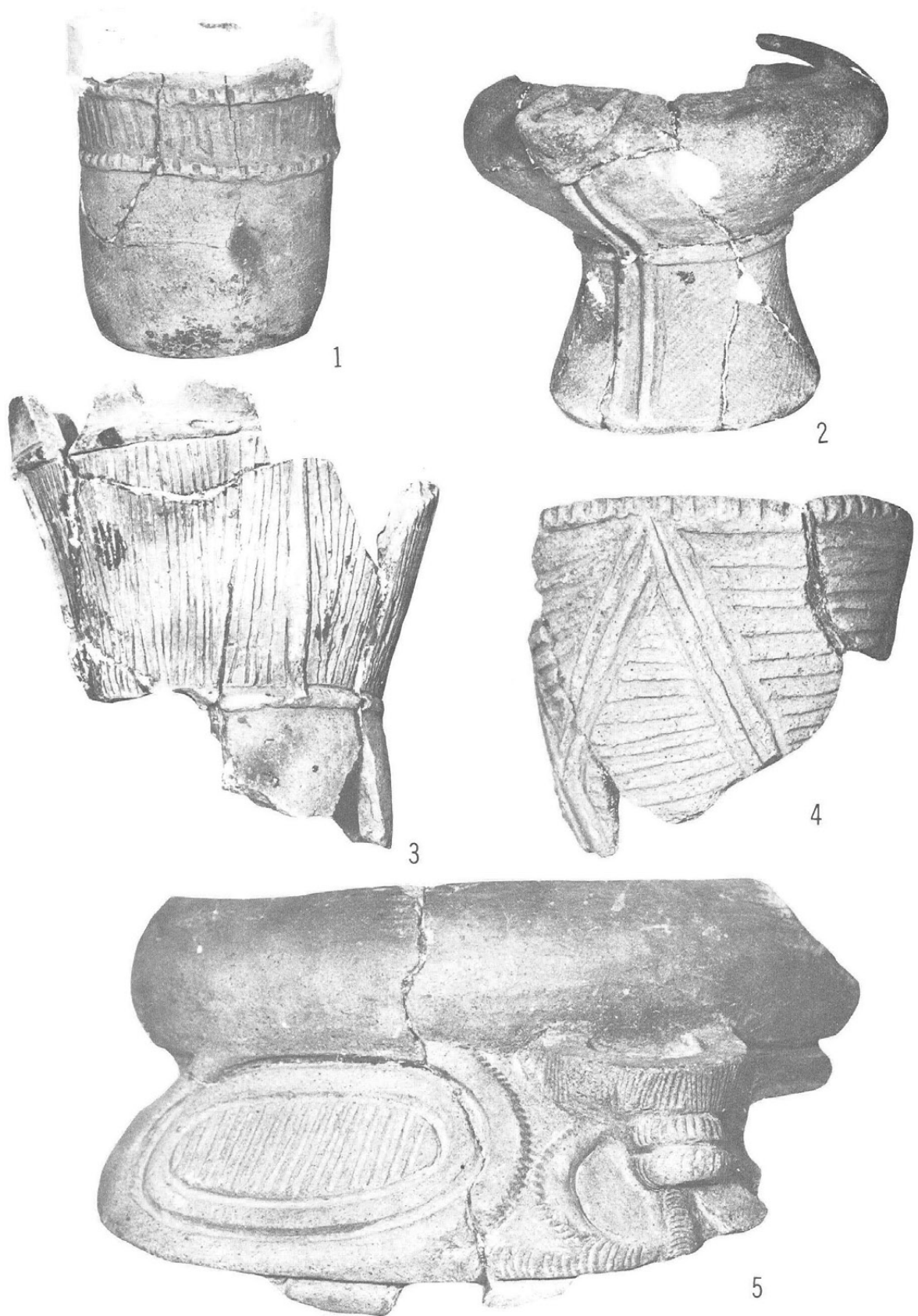




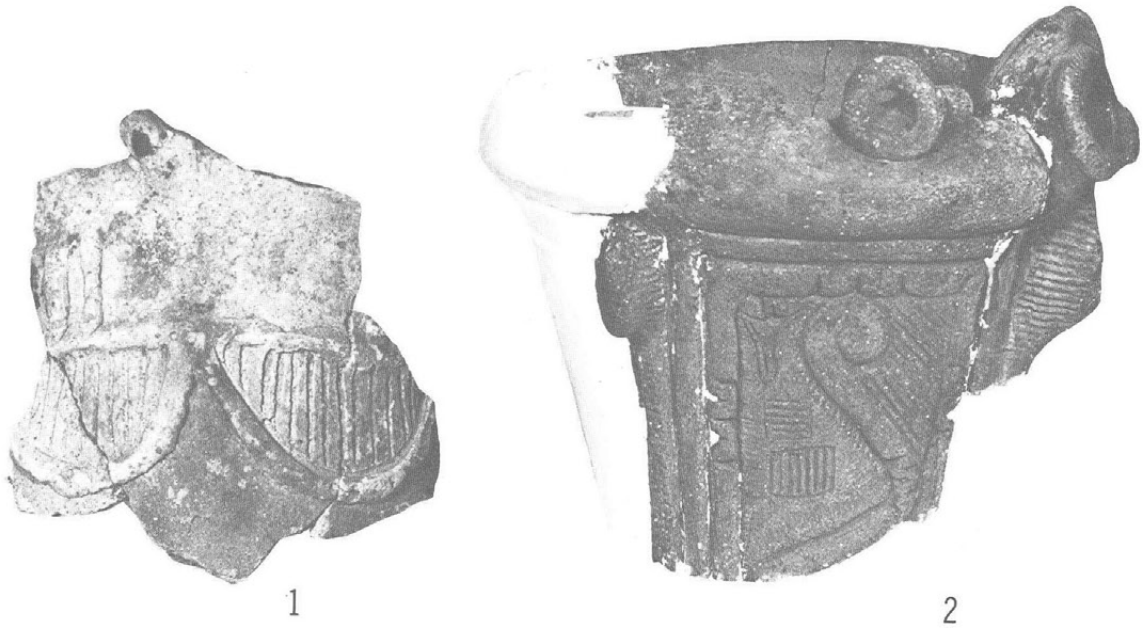
図版5 住居址出土土器（その1）1—70号住居址出土，2—96号住居址出土，3—4—71号住居址出土。



図版 6 住居址出土土器（その 2） 1—3—82号住居址。 2—89号住居址。 4—5—86号住居址。

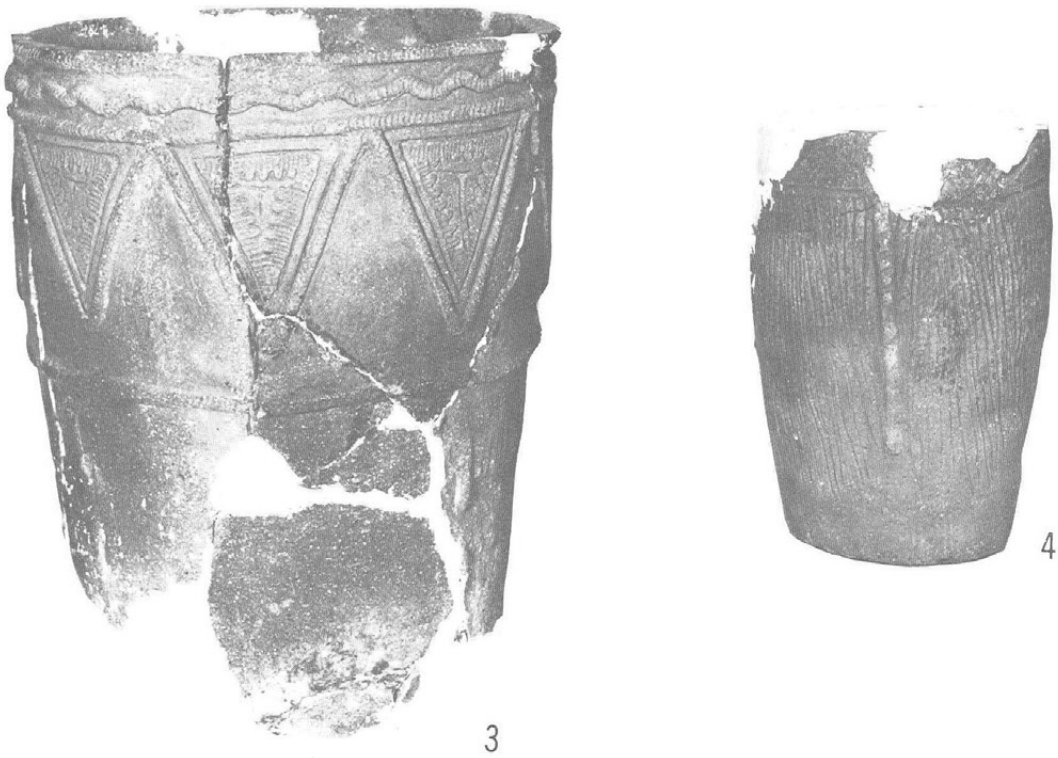


図版 7 住居址出土土器（その 3）85号住居址



1

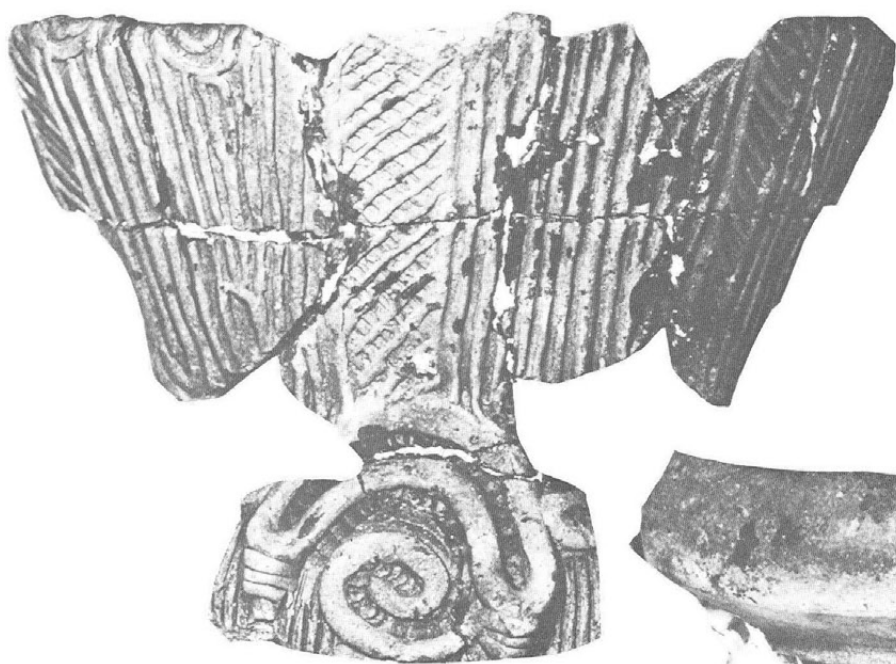
2



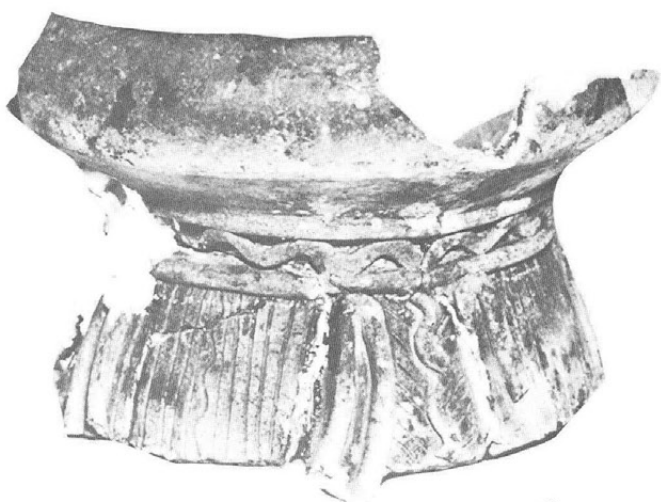
3

4

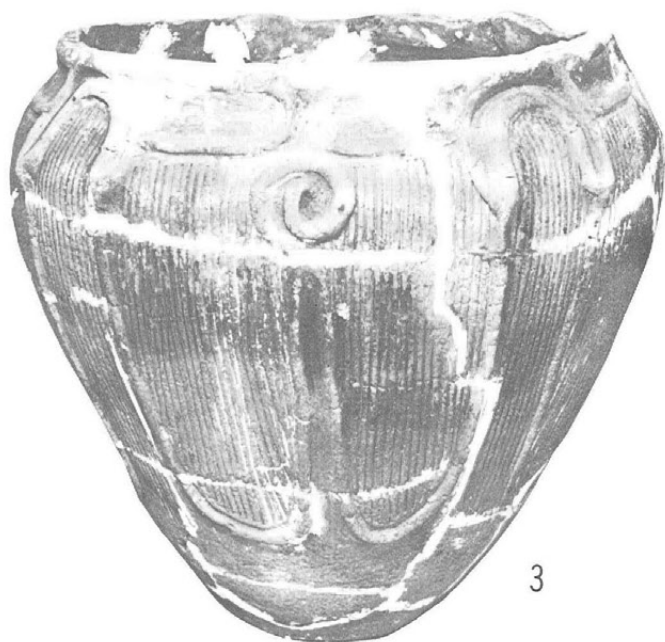
図版 8 住居址出土土器（その4）1—2—4—85号住居址，3—79号住居址



1



2

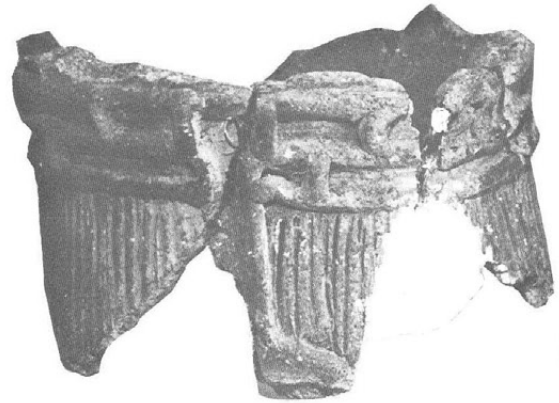


3

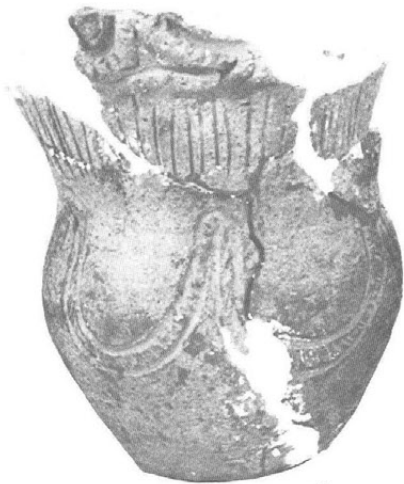
図版 9 住居址出土土器（その 5）102号住居址



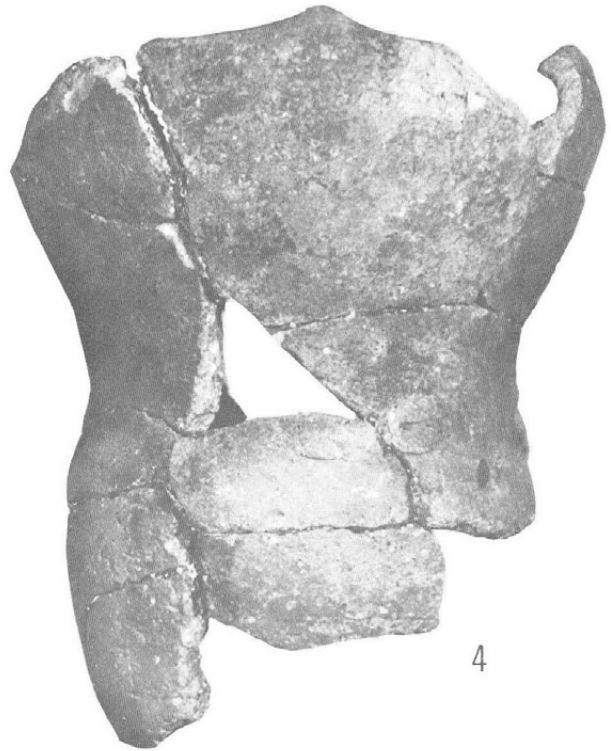
1



2



3

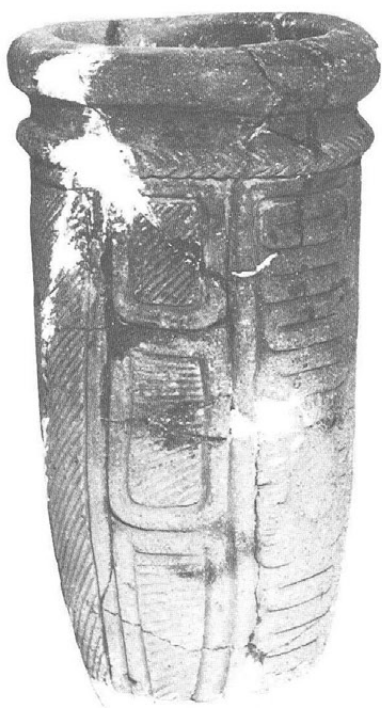


4



5

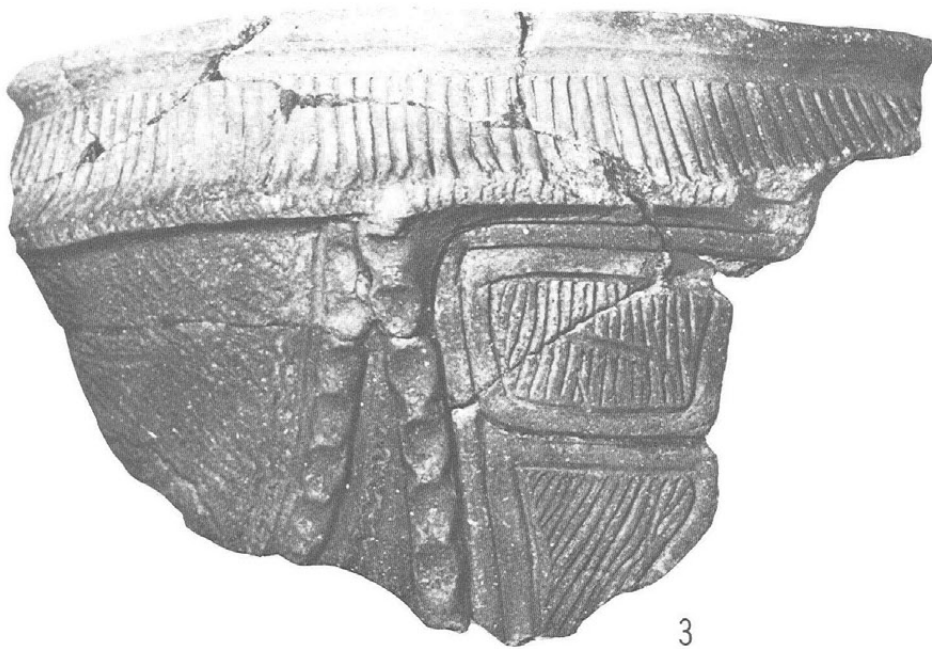
図版10 住居址出土土器（その6）1—2—4—106号住居址，3—93号住居址，5—100号住居址。



1

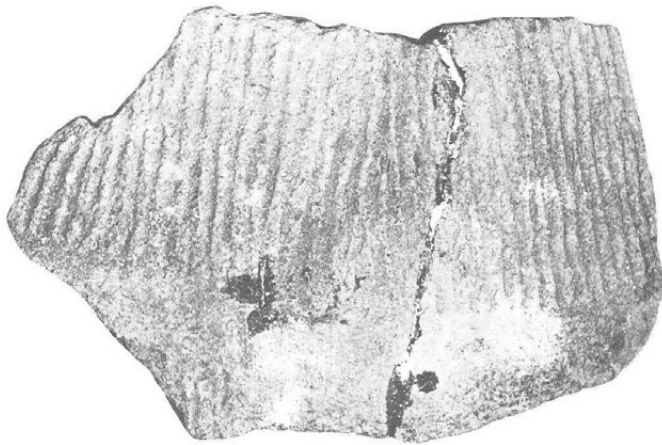


2



3

図版11 住居址出土土器（その7）1—2—3—109号住居址.



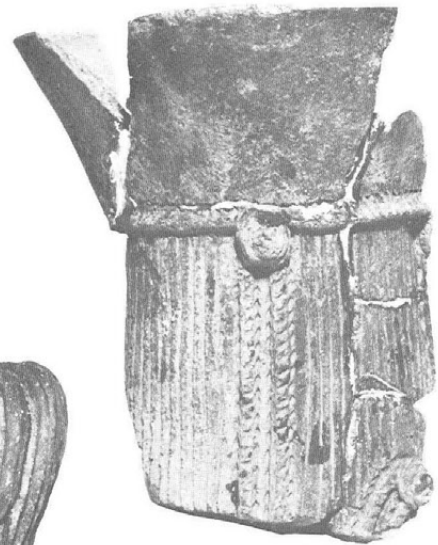
1



2



3



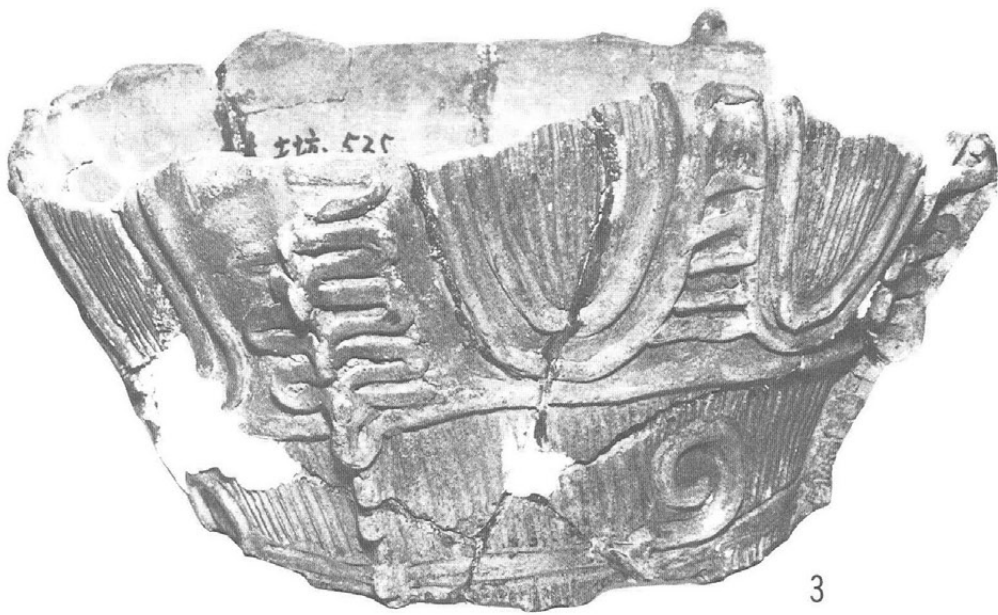
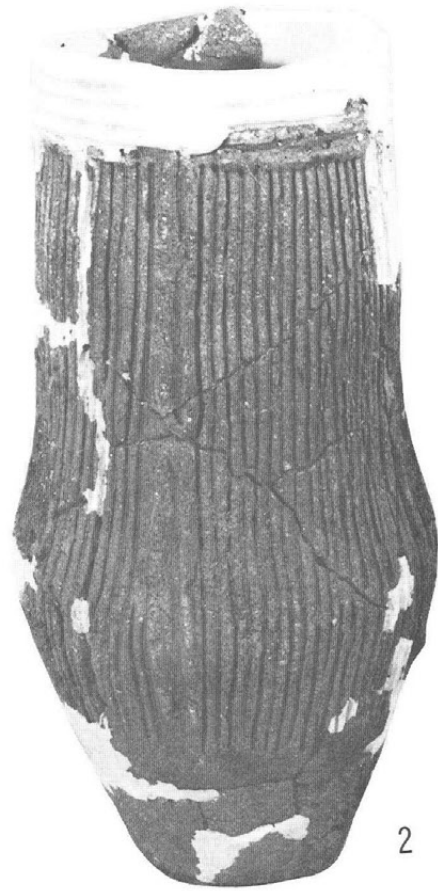
4



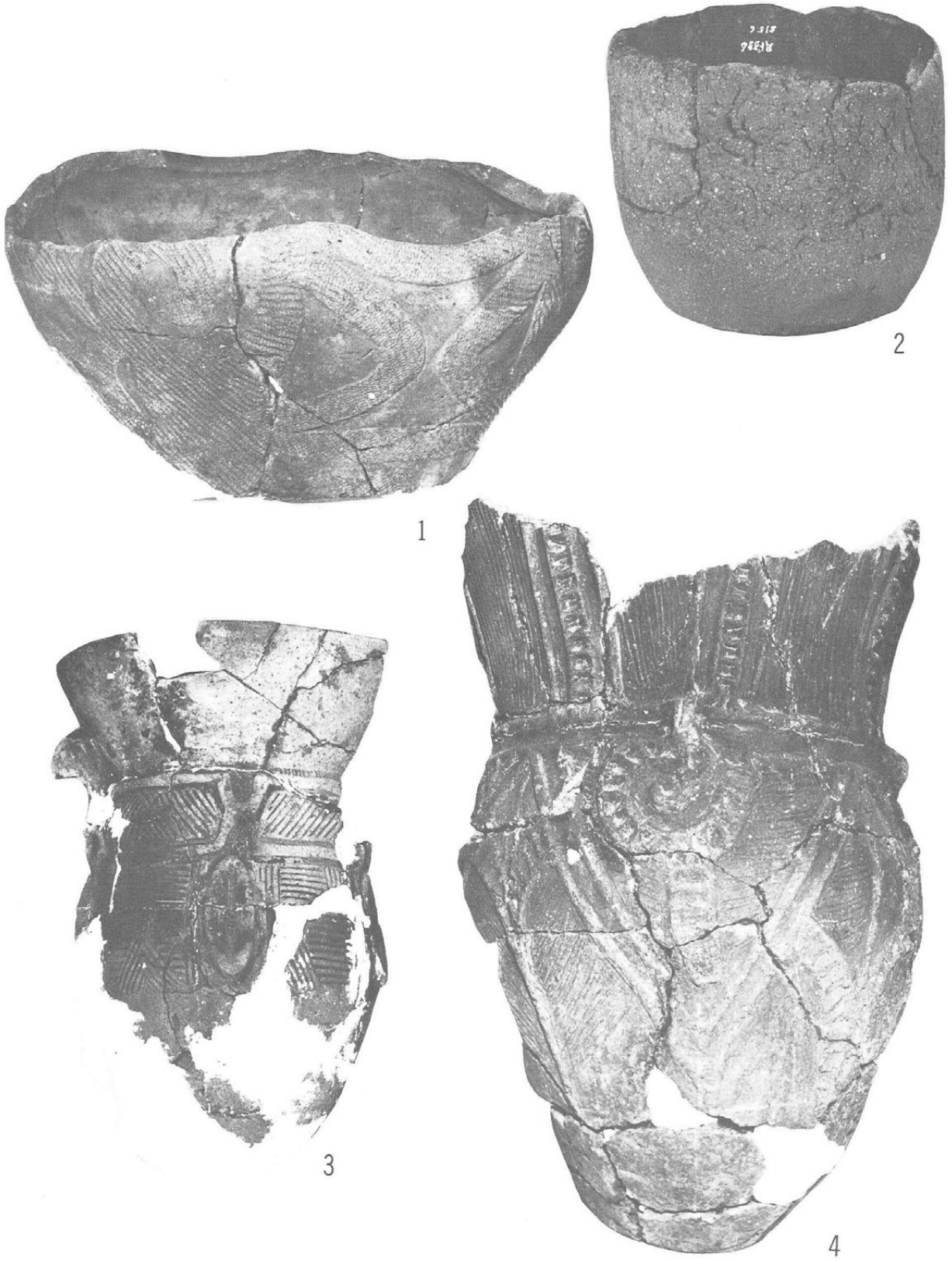
5

図版12 土塚出土土器（その1） 1—60号土塚， 2—43号土塚， 3—62号土塚， 4—109号土塚， 5—27号土塚

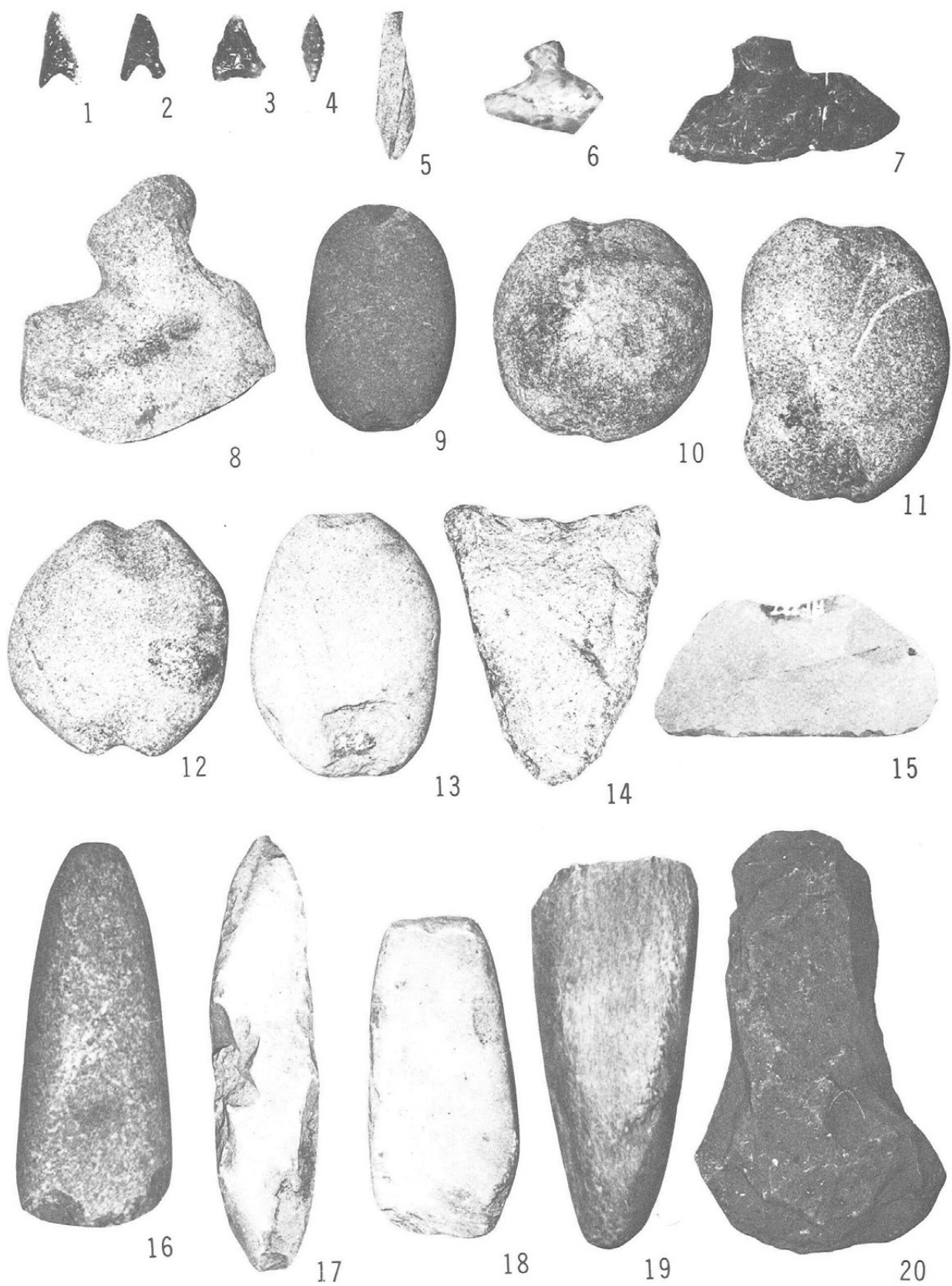




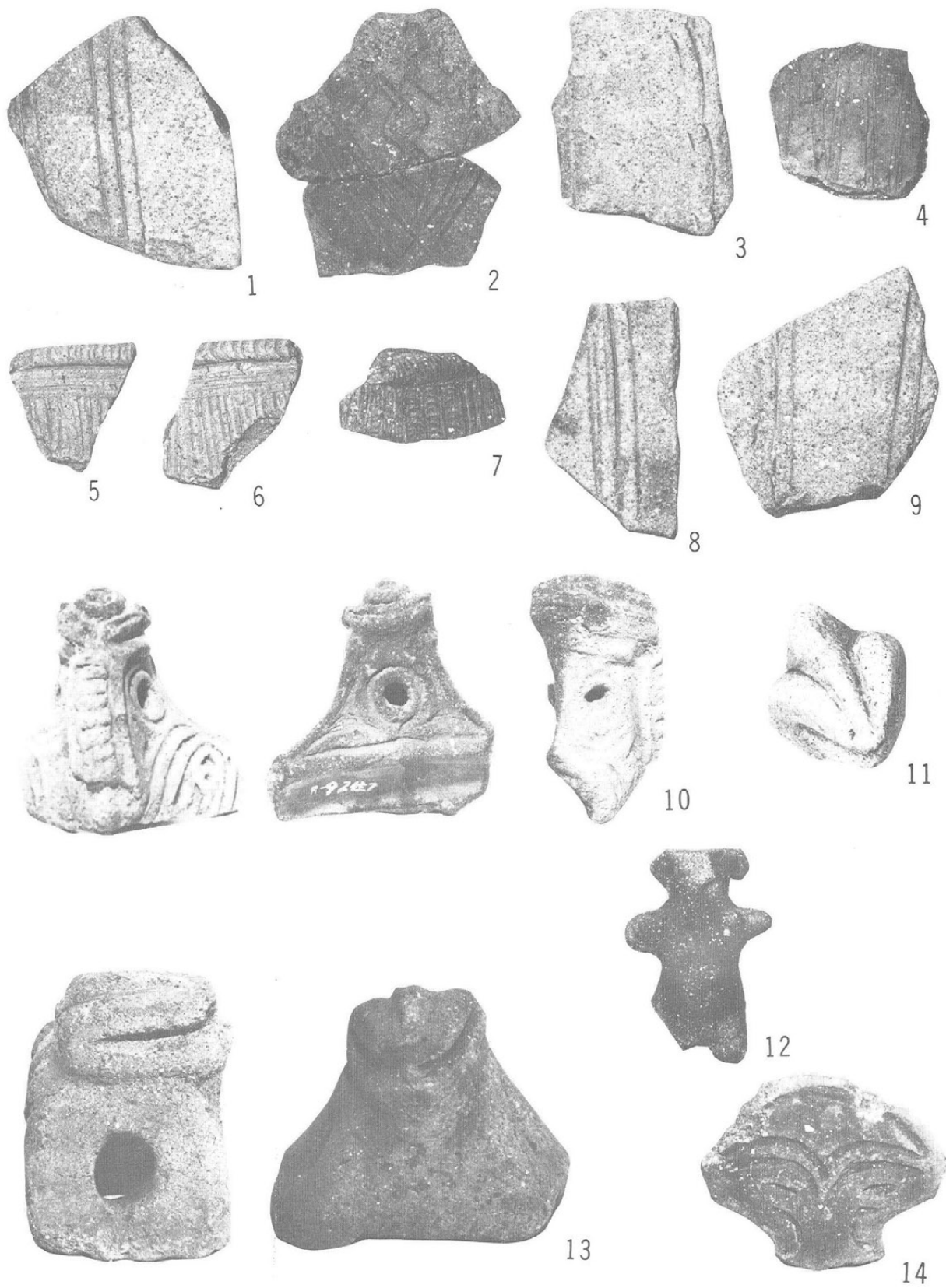
図版13 土坑出土土器（その2） 1—802号土坑、 2—23号土坑、 3—525号土坑。



図版14 土坑出土土器（その3）1—2—336号土坑，3—339号土坑，4—27号土坑。



图版15 出土石器 1—2—表採，3—73号土坑出土，4—438号土坑出土，5—68号土坑出土，6—333号土坑出土，7—8—表採，9—45号土坑出土，10~14—表採，15—227号土坑出土，16—108号土坑出土，17—18—表採，19—214号土坑出土，20—表採。



图版16 出土土器·土偶·蛇体装饰 1~9—111号住居址出土, 10—92号住居址出土, 11—77号住居址出土, 12—405号住居址出土, 13—77号住居址出土, 14—355号土城出土。

月見松遺跡  
第Ⅲ次緊急発掘調査概報

昭和52年3月10日 印刷

昭和52年3月15日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町

(株)オノウエ印刷

